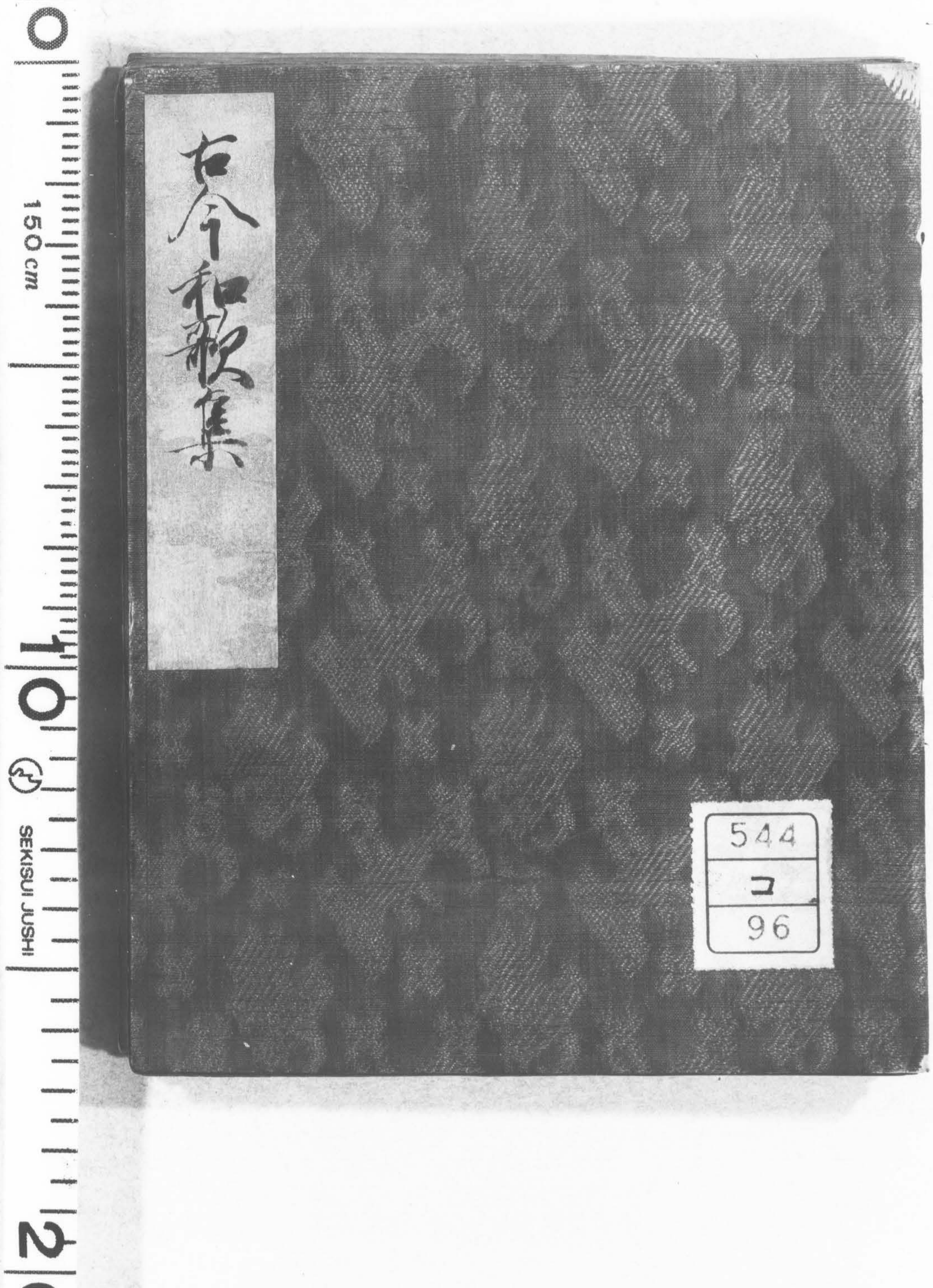
古今和歌集
三條西殿實隆公
古今和歌集
150 cm
10
SEKISUI JUSHI
20


古今和歌集
544
コ
96

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭和 24. 3. 19
182149

やまとうたはじとのしらせしねらしてよめ
つれとのもちうなわりまう世中にある人
ことよきさ志けさきとれなりはいはよはなふかしたし
萬もれさくまみよつまくいひらせらなり
花よめくうくはあるみはすむらられは空
こきけれいきよう、あわもろつれつらは
よ海さりけらちらはきいまたしてあはれ
つらなうこかしめふみてめたれよ神なきも

あれしとなもさせれとしなしなれなくは
霊やらうけたあまさきめ梅乃やう流をも
なくさしむいう弄なわさの事あ見きられ
ひらけらしまれまぬはわいてきつはわ
あまぬしまけしの志ていそめみなせかけをき
なわたまへおこはそれたなわ三ゝあれせ
き世よつきぬらはいひさうぬあゆみてい
したてうはしめよみて海わ　志てうはしめといふあめ
　まゝみてぬめなりせう
との神ぬちなさらいくうりてかやくなよろこひすうら
なまゝうれもれとものおさしはうれやうよもあらぬ

まても
なり　あらかねのつちにしてはすさのをのみこと
よりそおこりける　ちはやふる神代
にはうたのもしもさたまらす　すなほ
にして事の心わきかたかりけらし　人の
世となりてすさのをのみことよりそ
みそもしあまりひともしはよみける　すさのをのみことは　あまてる大神の
このかみなり　女とすみ給はむとていつものくにゝ宮つくり
し給ふ時にそのところにやいろのくものたつを見てよみた
まへるなり　やくもたついつもやへかきつまこめに　かくてそ花
やへかきつくるそのやへかきを

をめてとりをうらやみかすみをあはれひ
つゆをかなしふ心ことはおほくさまさまにな
りにけるとほき所もいてたつあしもとよ
りはしまりて年月をわたりたかき山も
ふもとのちりひちよりなりてあまくもた
なひくまておひのほれるかことくにこの哥もかく
のことくなるへし　なにはつのうたはみかと
のおほむはしめなり　あさか山

おほきさきみやとのなかにはつるそろとききこえけり時実家は
ふひなゆかりてくるかまつきたまはしてこせよなかよられた
王たとへの人のはかり思てよみくたてうけはわさや
うめりこれられいしゆゑれねはつるへし
まれとはすうねめれさられかうかへてき
なほしき見をみられたくへつるしたかけるくのつく事
よろせつなわしてさうけなりしらうれとすき御かうかな
うねめなかけるふめのうけはまとりてよ思つたかこれ御た
これうたはしきみれころけりあれ
うは御のちはすれやういてさてなるね
人のえしゆゑにも志けるふ思ひもくうたのさ
まむはなかわつるめうさいもかくさあれは

さりしてさめひとつよはさへたこれはしさせ
のみきねなさへてゆきうれ給うき
なりはよさくやこれくれはかる
いよきるへとさくやこ花とうらなし
うたははかうへうる
はくるれなむしつくるのわちさまき
すにはつきれいるまでにてと御かたし
これつくしもよ御ひとものよろへかまもさめ御地これるうるい
つるまあひなえるてしいつはき御まてとうるもこれなかへるまへさ

みたれはなにとへうたを

きみはけさあたの露のおきたれはない

こひしきことにきえやしなましと

これそものよもなしとへくちれりやうはなんあるとやうり
ふなれこれたしくめなすりともみてもちゑれむやう
うふこのゆこゑりはせてもあるいはとなれりと
おもすそからやなれやはいかなるらし
さとへうた

しのこひいらしもつきつありかのかれ

ちりぬまきこほたんつくすともいつなし

これはしらつの草まるけてはよつけて
うきくれらい所なしあきされとしめのうへたとおもし
やうなれとすうつはへしおなみつすそのあのしは
やく梅風をしてみんむりしぬ方ましれはきみらはこれをたを
思ふるふへ
へらし

いつもれなき世なれはせたり

ひとのこころもろれりし梅とふるみはし

これは事のこれかりしもきなてたなりこれのみなすかはやひ
れしくすさめそらやすへらし山さそあいまそいろとみつる

おもひくもいつはいろひた

うせなめたし

これとろいしへもしみけりときさきてきそれ

みなひとつにかよへるなるべし
これは世をほめて神につぐるなりこのうたいはひうたとはみえず
なむあればすゑのよにはわかれてしるしたるにこそ
うしなはれやかなふへしむたはせ
むくさにわかれむことはえあるまじきことになむいまの世の
中いろにつき人のこころ花になりにける
よりあだなるうたはかなきことのみいでくれ
ばいろごのみの家にむもれ木の人しれぬこと
となりてまめなるところには花すすき
ほにいだすべきことにもあらずなりにたり

そのはじめをおもへばかかるべくなむあらぬいに
しへの世々のみかど春の花のあした秋の月
の夜ごとにさぶらふ人々をめしてことに
つけつつうたをたてまつらしめたまふあるは
花をそふとてたよりなきところにまどひ
あるは月をおもふとてしるべなきやみに
たどれるこころごころをみたまひてさかしお
ろかなりとしろしめしけむしかあるのみにあ

あつはさく花いしよ里よへはくも山よかくて
きみを祈ひしろくこゝろおすおなたの
しいころにおきもし梅の葉すりよに
へくへとこひ杉まなのよ風のひさ
うちにすみれにほの杉もおひなるのやうに
おほえたとこ山の色しはにおいてなき
なすてれひとこはくれつにもうはいに
てうなくさめけるかゆる春のあしたな花

のちの世を見ん秋の田ふくれなきぬるの色
るはさくあはれにしこふかくみのけよ
み捨ゆきとなみにはた秀さ葉紅は
見つれあはれとみをくりかはれおはさあれ
君きのつきうえなとりて打はつれ山
世よわいやさしかりきもふくたりあるい
杉山乃狼なけ野なれみれはとくあさ
しきれしたなはれ光あけ月のしきの

はねかきをかそへあるはくれ竹のうき
節を人にいひよしの河をひきて世中
をうらみきつるに今はふしの山も煙たゝす
なりなからのはしもつくるなりときく人
は歌にのみそ心をなくさめけるいにしへ
よりかくつたはるうちにもならの御時よりそ（文武天皇）
ひろまりにけるかの御世や歌の心を
しろしめしたりけむかの御時に

おほきみつのくらゐかきのもとの人麿
なむ歌のひしりなりけるこれはきみも
ひとも身をあはせたりといふなるへし秋
のゆふへたつた河になかるゝもみちをはみか
との御めにはにしきとみたまひ春の
あしたよしのゝ山のさくらは人麿か心には
雲かとのみなむおほえける又山のへのあか
人といふ人ありけり歌にあやしくたへ

なりけり人まろは赤人かかみにたゝむ
ことかたくあか人は人まろかしもにたゝむ
ことかたくなむありける

ならの御門の御うた
龍田河もみちみたれて
なかるめりわたらはにしきなかやたえなむ　人丸　むめの花
それとも見えすひさかたのあまきる雪のなへてふれゝは　ほの〳〵と
あかしの浦のあさきりに嶋かくれゆく舟をしそ思ふ　赤人
春の野にすみれつみにとこしわれそ野をなつかしみ一夜ねにける
わかの浦にしほみちくれはかたをなみ
あしへをさしてたつなきわたる

この人々を
をきて又すくれたる人もくれ竹の世ゝに
きこえかたいとのよりよりにたえすそあり

これよりさきの歌をあつめてなむ　さき〳〵不審書校
万えうしふとなつけられたりけるこゝにい
しへのことをも哥をもしれる人よむ人
おほからすいまこの事をいふにつかさくらゐ
たかき人をはたやすきやうなれはいれす
そのほかちかき世にその名きこえたる人は
すなはち僧正遍昭は哥のさまはえたれとも
まことすくなし

らぬこれにはつかさくらゐたかき
ひとをはたやすきやうなれはいれす
そのほかにちかき世にその名きこえたる人は
すなはち僧正遍昭は哥のさまはえたれ
とも まことすくなし たとへは絵にかける
女をみていたつらに心をうこかすかこと
し

あさみとりいとよりかけてしらつゆを
たまにもぬけるはるのやなきか

はちすはのにこりにしまぬこゝろもて
なにかはつゆをたまとあさむく
さかのにてむまよりおちてよめる 名に
めてゝおれるはかりそをみなへし
われおちにきと人にかたるな

ありはらの業
ひらはそのこゝろあまりてことはたらす しほ
める花のいろなくてにほひのこれるかこと
し

月やあらぬはるやむかしのはるならぬ
わかみひとつはもとのみにして
おほかたは月をもめてしこれそこの
つもれは人のおいとなるもの
ねぬる夜の夢をはかなみまとろめは
いやはかなにもなりまさるかな

ふんやのやすひてはことははたくみにて
そのさまみにおはす いはゝあき
人のよききぬきたらむかことし

まれしかうせいしへしうせなあしとはしは事みるみえと
の御国忍よ字つきかにみれはけかくて日のゝあり
ふるや宇治山乃僧きせんはことはかすかにして
ましても志めをはりたしかならすいはゝ
秋の月をみるにあかつきの雲にあへるか
ことし　わかいほはみやこのたつみしかそすむ世を
　うちやまと人はいふなり
よみ侍りたれはよくきこえすいかなれは歌
りよはすてゝ志て決なるへきやうもあらしい
よしへのそとほりひめの流なるへし

やうにてつよからすいはゝよき女の
なやめるところあるにゝたりつよからぬは
うけるをうなのうたなれはなるへし　おもひつゝぬれはや
　人のみえつらむ
ゆめとしりせはさめさらましを　いろみえてうつろふものは
世中の人のこゝろの花にそありける　わひぬれは
くさのねをたえてさそふ水あらはいなむとそおもふ
ひめのうたせこゝろなきしひなりけるふみのくらぬなかまし
ねてしおもふ　大伴のくろぬしはそのさまいやし
いはゝたきゝおへる山人の花のかけにやすめる
かことし　おもひいてゝこひしき時ははつかりの
　なきてわたると人しるらめや

ゑ見やなはさくらちりて見くゆしこのほかの人々
まくゆきまいおひやしゆるに
その名きこゆる野邊におふるかつらのはひ
ひろこりはやしにしけきこのはのことくに
おほかれとうたとのみおもひてそのさま
しらぬなるへしかゝるにいますへらきの
あめのしたしろしめすことよつのとき
このかへりになむなりぬるあまねきおほ
むうつくしみのなみやしまのほかまて
なかれひろきおほむめくみのかけつくは
山のふもとよりもしけくおはしまして
よろつのまつりことをきこしめすいとまもろ
もろのことをすてたまはぬあまりにいにしへの
ことをもわすれしふりにしことをもおこし
たまふとていまもみそなはしのちのよにも
つたはれとて延喜五年四月十八日に大内記
きのとものり御書のところのあつかりきの

つらゆきさきのかひのさうくわんおほしかう
ちのみつね右衛門の府生たゝみね
らにおほせられて万えうしふにいらぬふる
きうたみつからのをもたてまつらしめ
給ひてなむそれかなかにむめをかさすよ
りはしめてほとゝきすをきゝもみちをを
りゆきをみるにいたるまて又つるかめ
につけてきみをおもひ人をもいはひ秋

はき夏くさをみてつまをこひあふさか
山にいたりてたむけをいのりあるは春夏
秋冬にもいらぬくさくさのうたをなむえら
はせ給ひけるすへて千うた廿まき
なつけてこきんわかしふといふかくこの
たひあつめえらはれて山したみつのたえ
すはまのまさこのかすおほくつもりぬれ
はいまはあすかゝはのせになるうらみ

きこえ給されいしのいとほとなくら
わかれのみにあかぬへきおもはまくなりて
春の花よりかひしくめくそむなしき
君の身秋の夜のなかきこはつこゑもか
時さへのいにしへにそれはつゝきの
しらはほうちふなへとしれしくいとたち
丹たくしの花木梅のにほひゆかし
らうこの世になすなくしまれくこの

事のはにあへ首なとなくしらこひめら
人のゆくなりまされ給ひての花ここ
すわうのさし時とりにほひさりたの
ひなしとゆきふるとこねりのえよ
あはれやあはやむかしをとこのまま
此の身のちりうせてしはきのて
なくこそありのあはれひさしく
かつさはるゝのさかはせりにほ

のちのよとえてこそ世人をおほそこの
月はみりこゝろよいにしへをおもふ
きていまはうしきゝめりつゝなむ

古今和哥集巻第一

春哥上

ふるとしに春たちける日よめる
在原元方
年のうちに春はきにけりひとゝせをこぞとやいはむことしとやいはむ

春たちける日よめる
紀貫之
袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

題しらず
よみ人しらず
春霞たてるやいづこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

二条のきさきの春のはじめの御うた
雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

題しらず
よみ人しらず
梅がえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

題しらず
素性法師
春たてば花とやみらむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

題しらず
よみ人しらず
心ざしふかくそめてしおりければきえあへぬ雪の花とみゆらん

二条のきさきの東宮のみやすん所ときこえける時正月三日おまへにめしておほせごとあるあひだに日はてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける

給けるに　　　ふんやのやすひて
春の日のひかりにあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき
雪のふりけるをよめる
きのつらゆき
霞たちこのめもはるの雪ふれは花なき里も花そちりける
春のはしめによめる
ふちはらのことなお　言直
春やとき花やおそきとききわかむうくひすたにもなかすもあるかな
はるのはしめのうた
みふのたゝみね
春きぬと人はいへとも鶯のなかぬかきりはあらしとそ思ふ
寛平御時きさいの宮の歌合のうた

源まさすみ　当純　近院右大臣男
谷風にとくる氷のひまことにうちいつる波や春の初花
紀とものり
花の香を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる
大江千里
鶯の谷よりいつる声なくは春くることをたれかしらまし
在原棟梁　業平朝臣男
春たてと花もにほはぬ山里はものうかるねに鶯そなく
題しらす
よみ人しらす
野辺ちかく家ゐしせれは鶯のなくなる声はあさなあさなきく
かすかのはけふはなやきそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり
み山には松の雪たにきえなくに宮こは野辺のわかなつみけり

春日のゝとふひのゝもりいてゝみよ今いくかありてわかなつみてん

梓弓おして春雨けふふりぬあすさへふらはわかなつみてん

仁和のみかと親王におはしましける時人に

わかなたまひける御うた

君かため春の野にいてゝわかなつむわか衣手に雪はふりつゝ

うたたてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

かすかのゝわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

題しらす

在原行平朝臣

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみたるへらなれ

寛平御時きさいの宮の歌合によめる

源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり

哥たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

わかせこか衣はるさめふることに野へのみとりそ色まさりける

青柳の糸よりかくる春しもそみたれて花のほころひにける

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

あさみとりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

題しらす

よみ人しらす

もゝちとりさへつる春は物ことにあらたまれともわれそふりゆく

をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かな

かりのこゑをきゝてこしへまかりにける人を思ひてよめる

思ひてよめる　凡河内躬恒

春くれは鴈かへるなり白雲の道ゆきふりにことやつてまし

帰かりをよめる　伊勢

はる霞立をみすてゝゆくかりは花なき里にすみやならへる

題しらす　よみ人しらす

折つれは袖こそにほへ梅花ありとやこゝに鶯のなく

色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれしやとの梅そも

やとちかく梅の花うへしあちきなくまつ人の香にあやまたれけり

梅花たちよるはかりありしより人のとかむる香にそしみぬる

梅の花をおりてよめる　東三条左大臣

源常　嵯峨源氏 左大臣 左大将 斉衡元年薨 卅四

鶯の笠にぬふといふ梅の花おりてかさゝむ老かくるやと

題しらす　素性法師

よそにのみあはれとそみし梅花あかぬ色香はおりてなりけり

梅の花をおりて人におくりける　とものり

君ならて誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人そしる

くらふ山にてよめる　つらゆき

梅花にほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそ有ける

月夜に梅の花をおりてと人のいひけれはおりてよめる　みつね

月夜にはそれともみえす梅花香をたつねてそしるへかりける

これの宗じゆんのかれをとよめる
〽春風よのやみはあやなし梅花こそ人ぞ知るやみは
しらきよまにけつこしよやらりけるへの
家りいさしくやとうて行くへくのうふ
いゑ出り茶わりれ之へのあれしかくさく
こよなしじやと思はあれとついてしく植れし
きそこにそりあれ梅花をおりてよめる
はゆうさ
〽今さいのも志てほめけれは花そ春風にかひとる
水ぬはよりよ梅花さかりけり伝よ出れ
伴殿
春といふ河と花とみてたれかあ水よ神やゆん

手洗ふ花の鏡とたゝ御水いちりもかやくりつれ
家よあり茶梅花のちり時ほよめる
つゆさ
冬河とあくとめれあ梅よ梅花いつの人ていろいゆん
寛字清次さいの官の宗合のた
しひとしよ
梅と神よう了さとそそいま(い)ほくともかくさるま
善法師
ちとみくあやき神よ梅花をそもいひの神とまれ
聖かもそ
しみにくに
ちりぬともかくとしのちせ梅花こいき時の思ひてよとん
〽の家よう人ありあるの花さ[illegible]

めたりけるを見てよめる
つらゆき
ことしより春しりそむる桜花ちるといふ事はならはさらなん
題しらす　よみ人しらす
山たかみ人もすさめぬ桜花いたくなわひそ我見はやさん
又は　里とをみ人もすさめぬ山さくら
山さくらわか見にくれは春霞峰にも尾にもたちかくしつゝ
清和母后明子　昌泰三年五月廿三日崩七十二　大皇大后宮
そめとののきさきのおまへに花かめに桜の花をさゝせ給へるを見てよめる
さきのおほきおほいまうちきみ　忠仁公　摂政太政大臣
年ふれはよはひはおいぬしかはあれと花をし見れは物思ひもなし
なきさの院にて桜を見てよめる
在原業平朝臣
世中にたえて桜のなかりせは春の心はのとけからまし
題しらす　よみ人しらす
いしはしるたきなくもかな桜花たをりてもこん見ぬ人のため
山の桜を見てよめる
そせい法師
見てのみや人にかたらん桜花手ことにおりていへつとにせん
花さかりに京を見やりてよめる
見わたせは柳桜をこきませて宮こそ春の錦なりける
桜の花のもとにて年のおいぬる事をなけきてよめる
きのとものり

色もかも同昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける
をれるさくらをよめる
つらゆき
誰志かもとめてをりつる春霞たちかくすらん山の桜を
哥たてまつれとおほせられし時によみて
奉れる
桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
とものり
みよしのの山辺にさける桜花雪かとのみぞあやまたれける
やよひにうるふ月ありける年よみける
伊勢

桜花春くははれる年だにも人の心にあかれやはせぬ
さくらの花のさかりにひさしくとはざりける
人のきたりける時によみける
よみ人しらず
あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり
返し
なりひらの朝臣
けふこずはあすは雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや
よみ人しらず
ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそ桜をらばをりてめ
折りとらばをしげにもあるか桜花いざやどかりてちるまでは見ん
素性
きのありとも
桜色に衣はふかくそめてきん花のちりなん後のかたみに

桜の花のさけりけるを見にまうてきたりける
人によみておくりける　みつね

わかやとの花見かてらにくる人はちりなむのちそこひしかるへき

亭子院歌合の時よめる　伊勢

見る人もなき山里の桜花ほかのちりなむのちそさかまし

古今和歌集巻第二

春歌下

題しらす　よみ人しらす

春霞たなひく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならは何を桜に思ひまさまし

のこりなくちるそめてたき桜花ありて世の中はてのうけれは

この里に旅ねしぬへし桜花ちりのまかひに家路わすれて

うつせみの世にもにたるか花桜さくと見しまにかつちりにけり

僧正遍昭によみておくりける　これたかのみこ（惟喬　文徳第一　母従四位上紀種子　名虎女）

桜花ちらはちらなむちらすとてふるさと人のきても見なくに

雲林院にてさくらの花のちりけるを見て

よめる
そうく法師 承均
さくらちる花の所は春なから雪そふりつゝきえかてにする
さくらの花のちり侍けるをみてよみける
そせい法師
花ちらす風のやとりはたれかしる我にをしへよ行てうらみん
うりんゐんにてさくらの花をよめる
そうく法師
いさゝくら我もちりなむ一さかり有なは人にうきめみえなん
あひしりける人のまうてきてかへりにける後によみて花にさしてつかはしける
つらゆき
ひとめみし君もやくると桜花けふはまちみてちらはちらなん

山のさくらをみてよめる
春霞なにかくすらん桜花ちるまをたにもみるへき物を
心ちそこなひてわつらひける時に風にあたらしとておろしこめてのみ侍けるあひたにおれるさくらのちりかたになれりけるをみてよめる
藤原よるかの朝臣 典侍 貞観 寛平 延喜
たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし桜もうつろひにけり
東宮雅院 待賢門内北 壬生東 にてさくらの花のみかは水にちりてなかれけるをみてよめる
すかのゝたか世
枝よりもあたにちりにし花なれはおちても水のあわとこそなれ

さくらの花のちりけるをよみける
つらゆき
ことならはさかすやはあらぬ桜花みる我さへにしつ心なし
さくらのことくちる物はなしと人のいひけれは
よめる
桜花とくちりぬとも思ほえす人の心そ風も吹あへぬ
さくらの花のちるをよめる
きのとものり
久方のひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん
春宮のたちはきのちんにてさくらの花の
ちるをよめる
藤原よしかせ　好風 良風
春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふと見ん

さくらのちるをよめる
凡河内みつね
雪とのみふるたにあるを桜花いかにちれとか風の吹らむ
ひえにのほりてかへりまうてきてよめる
つらゆき
山たかみ見つゝわかこし桜花風は心にまかすへらなり
たいしらす
一本 大伴くろぬし
春雨のふるは涙か桜花ちるをおしまぬ人しなけれは
亭子院哥合うた
つらゆき
桜花ちりぬる風のなこりには水なき空に浪そたちける
ならのみかとの御うた
平城天皇也 大同天子

ふるさとゝなりにしならのみやこにも色はかはらす花はさきけり

春のうたとてよめる

よしみねのむねさた

花の色は霞にこめてみせすともかをたにぬすめ春の山風

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

そせい法師

花の木も今はほりうゑし春たてはうつろふ色に人ならひけり

題しらす

よみ人しらす

春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかさる花の見ゆらん

春のうたとてよめる

つらゆき

三わ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらん

うりむ院のみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる

そせい

いさけふは春の山へにましりなんくれなはなけの花のかけかは

春のうたとてよめる

いつまてか野へに心のあくかれん花しちらすは千世もへぬへし

題しらす

よみ人しらす

春ことに花のさかりはありなめとあひ見むことは命なりけり

花のことよのつねならはすくしてしむかしは又もかへりきなまし

吹風にあつらへつくる物ならはこのひともとはよきよといはまし

まつ人もこぬものゆへに鶯のなきつる花をおりてけるかな

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原ためよせ

ゆく花はちらさしよあるなれと頼みはまた根にそかへらん

春霞たちのちらぬよみてつるはなをしく山乃花のけふかな

在原元方

霞たつ春乃山邊はとをけれと吹くる風は花乃かそする

うつろへる花を見てよめる

みつね

花見れは心さへにそうつりける色には出しへ人もこそしれ

題しらす

よみ人しらす

鶯のなく野へことにきてみれはうつろふ花に風そ吹ける

吹風を鳴て恨よ鶯は我やは花に手たにふれたる

典侍洽子朝臣　アヤコアソン

寛平　延喜掌侍典侍

糸所別當

ちる花のなくにしとまる物ならは我鶯におとらましやは

仁和の中将のみやすん所の家に歌合せむとしける時によめる

藤原のちかけ　蔵人右少将　中納言有穂男

花のちる事やわひしき春霞たつたの山の鶯の聲

うくひすのなくをよめる

そせい

こつたへはをのか羽風にちる花をたれにおほせてこゝらなくらん

鶯の花の木にてなくをよめる

みつね

しるしなきねをもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらす

よみ人しらす

こまなめていさみにゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ
ちる花を何か恨ん世中に我身もともにあらん物かは
小野小町
花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに
仁和の中将の御息所の家に歌合せんとしける時によめる
そせい
をしと思ふ心はいとによられなん散花ことにぬきてとゝめん
しかの山こえに女のおほくあへりけるによみてつかはしける
つらゆき
梓弓春の山辺をこえくれは道もさりあへす花そちりける
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
春の野にわかなつまむとこし物をちりかふ花に道はまとひぬ
山てらにまうてたりけるによめる
やとりして春の山へにねたるよは夢の内にも花そちりける
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
吹風と谷の水としなかりせはみ山かくれの花を見ましや
しかゝらかへりける女ともの花山にいりて藤の花のもとにたちよりてかへりけるに
よみておくりける
僧正遍昭
よそにみてかへらん人に藤の花はひまつはれよ枝はをるとも
家にふちの花さけりけるを人のたち

とまりて見けるをよめる　みつね

我やとにさける藤浪たちかへりすきかてにのみ人のみるらん

題しらす　よみ人しらす

今もかもさきにほふらん橘のこしまのさきの山吹の花

春雨ににほへる色もあかなくにかさへなつかし山吹の花

山吹はあやなゝさきそ花みんとうへけん君かこよひこなくに

よしの河のほとりに山吹のさけりけるを
よめる　つらゆき

吉野河岸の山吹ふく風にそこのかけさへうつろひにけり

題しらす　よみ人しらす

かはつ鳴井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

この哥はある人のいはく橘清友か哥也　清友贈太政大臣 嵯峨后父

春のうたとてよめる　そせい

思ふとち春の山辺にうちむれてそこともいはぬたひねしてしか

春のとくすくるをよめる　みつね

梓弓春たちしより年月のいることくにもおもほゆるかな

やよひにうくひすのこゑのひさしうきこえ
さりけるをよめる　つらゆき

なきとむる花しなけれはうくひすもはてはものうくなりぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえけるに

山河より花のなかれけるをよめる

ふかやふ

花ちれる水のまにまにとめくれは山には春もなくなりにけり

はるをおしみてよめる

もとかた

惜めともとゝまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

おきかせ

聲たえすなけや鶯ひとゝせに再とたにくへき春かは

やよひのつこもりの日花つみよりかへりける女ともをみてよめる

みつね

とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふ心か

やよひのつこもりの日雨のふりけるに

ふちの花をゝりて人につかはしける

なりひらの朝臣

ぬれつゝそしひて折つる年の内に春はいくかもあらしと思へは

亭子院歌合に春のはての歌

みつね

今日のみと春をおもはぬ時たにも立ことやすき花のかけかは

古今和歌集巻第三

夏哥

題しらす　　よみ人しらす

わかやとの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ

このうたある人のいはく柿本人麿か也

う月にさけるさくらを見てよめる　　紀としさた

あはれてふことをあまたにやらしとや春におくれてひとりさくらむ

題しらす　　よみ人しらす

五月まつ山郭公うちはふき今もなかなむこそのふるこゑ

伊勢

さ月こはなきもふりなむ郭公またしきほとのこゑをきかはや

よみ人しらす

五月まつ花橘のかをかけは昔の人の袖のかそする

いつのまに五月きぬらむあしひきの山郭公いまそなくなる

けさきなきいまた旅なる郭公花橘にやとはからなむ

をとは山をこえける時に郭公のなくをきゝて
よめる　　紀とものり

をとは山けさこえくれは郭公こすゑはるかに今そなくなる

郭公のはしめてなきけるをきゝて　　そせい

郭公はつこゑきけはあちきなくぬしさたまらぬ恋せらるはた

ならのいそのかみてらにて郭公のなくを
よめる

磯神ふるき都のほとゝきすこゑはかりこそ昔なりけれ

題しらす　よみ人しらす

夏山に鳴郭公心あらは物思ふ我にこゑなきかせそ

郭公鳴こゑきけは別にしふるさとさへそこひしかりける

ほとゝきすなかなく里のあまたあれはなをうとまれぬ思ふものから

思ひいつるときはの山の郭公からくれなゐのふりいてゝそなく

こゑはして涙はみえぬ郭公わか衣てのひつをからなん

葦引乃山郭公折はへて誰かまさると音をのみそなく

今更に山へかへるな郭公こゑのかきりは我やとになけ

みくにのまち

やよやまて山郭公事つてん我世中にすみわひぬとよ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

紀とものり

五月雨に物思ひをれは郭公夜ふかく鳴ていつちゆくらん

夜やくらき道やまとへる郭公我やとをしも過かてになく

大江千里

やとりせし花橘もかれなくになと郭公こゑたえぬらん

きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれは郭公なく一声にあくるしのゝめ

みふのたゝみね

くるゝかとみれはあけぬる夏の夜をあかすとやなく山郭公

紀秋岑

夏山にこひしき人やいりにけんこゑふりたてゝなく郭公

題しらす　よみ人しらす

去年は夏鳴かずして郭公されはあらぬか都のほとりに
おもひ出の人しのばれてよめる

つゆき

五月雨のころとなりぬるに郭公何とてしはしまたで鳴らん
さふひそかよること意のけさへなりけり
みて郭公まつ夢よりさめもやられし
よめる

義了

郭公こ声もきこえて涼しひこゝろは鳴いてほとゝぎすやまのは
山のはよりよるのなきけるときゝてよめる

つゆき

郭公人よりさきに鳴きつらむ
くやくすかん声のところそ鳴るのなき

まつときゝてよめる

曲みれ

昔へや今も忘れぬ郭公ねにたてにしも鳴てきかん
ほとゝきすのなきけるときゝてよめる

みゆき

郭公我といなしに卯花のよき垣ねに鳴もしらせ
くらべ乃露をみてよめる

信心入せう

くらべ花のよしろに末おもはしそ何の露と玉とあざむく
月乃おもしろかりける夜暁よめる

みやね

夜のほともよあけぬると月や見ん

隣りとこなつの花をこひにおこせたりければ
をしみてこのうたをよみてつかはしける
躬恒
ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこなつの花
みな月のつごもりの日よめる
夏と秋と行かふ空のかよひぢはかたへすゞしき風や吹らん

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる　　藤原敏行朝臣
秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
秋立日うへのをのこども賀茂のかはらに
河せうえうしける供にまかりてよめる
つらゆき
河風のすゞしくも有か打よする浪とゝもにや秋は立らん
題しらず　　よみ人しらず
わがせこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋の初風
昨日こそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹
秋風の吹にし日より久かたのあまのかはらにたゝぬ日はなし

以本のあしたのまへしより右海と八地かくてゐら
漢河よみうと標よまさつや織女つる杙と霧杉
こひて逢夜ハおよひしも河云立とわたわきすま也
寛平御時なぬかの夜うへに侍をのこと
も哥奉れとおほせられける時
人にかはりてよめる
とものり
天河浅せ白浪たとりつゝわたりはてねはあけそしにける
おなしく御時きさいの宮の哥合のうた
藤原おきかせ
契けむこゝろそつらき織女乃年にひとたひ逢はあふかは
なぬかの日の夜よめる
凡河内みつね
年ことに逢とはすれと織女のぬる夜のかすそすくなかりける
織女にかしつる糸のうちはへて年の緒なかく恋やわたらん
題しらす
素性
こひ〳〵て今はあけす織女のひもときさくなるもしれ
なぬかの夜のあかつきによめる
源宗于朝臣
いまはとて別る時は天河わたらぬさきに袖そひちぬる
やうかの日よめる
みふのたゝみね
けふよりは今こむ年のきのふをそいつしかとのみ待わたるへき
題しらす
よみ人しらす

このまよりもりくる月の影見れは心つくしの秋はきにけり

おほかたの秋くるからにわか身こそかなしき物と思ひしりぬれ

わかために来る秋にしもあらなくに虫の音きけはまつそかなしき

物ことに秋そかなしきもみちつゝうつろひゆくを限と思へは

独ぬる床は草葉にあらねとも秋くるよひは露けかりけり

是貞 仁和第二 元右中将 母同寛平

これさたのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふ事の限なりける

かみなりのつほに人々あつまりて秋の夜

おしみけるついてによめる　躬恒

かくはかりをしと思ふ夜をいたつらにねてあかすらん人さへそうき

題しらす　よみ人しらす

白雲に羽うちかはし飛雁のかすさへみゆる秋の夜の月

さよ中と夜はふけぬらし雁かねのきこゆる空に月わたる見ゆ

これさたのみこの家の歌合によめる

大江千里

月見れはちゝに物こそかなしけれわか身ひとつの秋にはあらねと

忠岑

久方の月の桂も秋は猶もみちすれはやてりまさるらむ

月をよめる　在原元方

秋の夜の月の光しあかけれはくらふの山もこえぬへらなり

人のもとにまかれりける夜きり〳〵すのなきけるをきゝてよめる

藤原忠房

蛬いたくななきそ秋の夜のなかき思ひは我そまされる

是貞のみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

秋の夜のあくるもしらす鳴虫はわかことものやかなしかるらん

題しらす

よみ人しらす

秋萩も色つきぬれはきりきりすわかねぬことや夜はかなしき

秋の夜は露こそことにさむからし草むらことに虫のわふれは

君しのふ草にやつるゝふるさとは松虫の音そかなしかりける

秋の野に道もまよひぬ松虫の声する方に宿やからまし

あきの野に人松虫の声すなり我かとゆきていさとふらはん

もみちはのちりてつもれる我やとに誰を松虫こゝらなくらん

日くらしの鳴つるなへに日はくれぬと思ふは山のかけにそ有ける

ひくらしのなく山里の夕くれは風よりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる

在原元方

まつ人にあらぬものからはつかりのけさ鳴声のめつらしきかな

これさたのみこの家の歌合のうた

とものり

秋風にはつかりかねそきこゆなるたかたまつさをかけてきつらん

題しらす

よみ人しらす

わか門にいなおほせ鳥のなくなへにけさ吹風に雁はきにけり

いとはやも鳴ぬる雁か白露の色とる木々ももみちあへなくに

春霞かすみていにしかりかねは今そなくなる秋霧のうへに

夜をさむみ衣かりかね鳴なへに萩の下葉もうつろひにけり

図書

このうたハある人のいはく柿本の人丸か也と

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあけてくる舟ハあまのとわたるかりにそありける

かりのなきけるをきゝてよめる

みつね

うきことを思つらねてかりかねのなきこそわたれ秋のよな／＼

これさたのみこの家の哥合のうた

たゝみね

山里ハ秋こそことにわひしけれしかのなくねにめをさましつゝ

よみ人しらす

奥山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時そ秋ハかなしき

題しらす

秋はきにうらひれをれはあしひきの山したとよみしかのなくらん

あきはきをしからみふせてなくしかのめにはみえすておとのさやけさ

これさたのみこの家の哥合によめる

藤原としゆきの朝臣

秋萩の花さきにけり高砂のおのへの鹿は今やなくらん

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にあひてものかたりしけるついてによめる

みつね

秋萩のふるえにさける花みれは本の心はわすれさりけり

題しらす

よみ人しらす

秋萩の下葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする

鳴わたるかりの涙やおちつらん物おもふやとの萩の上の露

萩の露玉にぬかむととれはきえぬよし見む人は枝なから見よ

ある人のいはく此うたはならのみかとの御哥なりと

折てみはおちそしぬへき秋萩の枝もたはゝ（とを）における白露

一 萩か花ちるらんをのゝつゆしもにぬれてをゆかんさよはふくとも

是貞のみこの家の哥合によめる

文屋あさやす

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすち

題しらす

僧正へんせう

名にめてゝおれるはかりそ女郎花我おちにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとにならへまかりける時に

をとこ山にてをみなへしをみてよめる

ふるのいまみち

をみなへしうしとみつゝそゆきすくるをとこ山にしたてりと思へは

是貞のみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

秋の野にやとりはすへし女郎花名をむつましみたひならなくに

題しらす

をのゝよしき

をみなへしおほかるのへにやとりせはあやなくあたの名をやたちなん

朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける

左のおほいまうちきみ（本院贈太政大臣）

をみなへし秋のゝ風にうちなひき心ひとつをたれによすらん

藤原定方朝臣（三条右大臣）

秋ならて逢事かたき女郎花あまのかはらにおひぬものゆへ

つらゆき

たか秋にあらぬものゆへ女郎花なそ色にいてゝまたきうつろふ

みつね

つまこふる鹿そ鳴なる女郎花をのかすむ野の花としらすや

をみなへし吹すきてくる秋風はめにはみえねとかこそしるけれ

たゝみね

人の見る事やくるしき女郎花秋きりにのみたちかくるらん

獨のみなかむるよりは女郎花わかすむやとにうへて見ましを

ものへまかりけるに人の家に女郎花うへたりけるを見てよめる

兼覧王

をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやとに獨たてれは

寛平御時蔵人所のをのことも嵯峨野に花見むとてまかりたりける時かへるとてみな哥よみけるついてによめる

平さたふん

花にあかてなにかへるらん女郎花おほかる野へにねなましものを

これさたのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

なに人かきてぬきかけし藤はかまくる秋ことに野へをにほはす

ふちはかまをよみて人につかはしける

つらゆき

やとりせし人のかたみか藤はかまわすられかたき香ににほひつゝ

ふちはかまをよめる　素性

ぬしゝらぬかこそにほへれ秋のゝにたかぬきかけしふちはかまそも

題しらず　平貞文

今よりはうへてたに見し花すゝきほにいつる秋はわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

秋の野の草のたもとか花すゝきほにいてゝまねく袖と見ゆらん
在原棟梁

我のみやあはれとおもはむきり〳〵すなくゆふかけのやまとなてしこ
素性法師

題しらず　よみ人しらず

みとりなるひとつ草とそ春は見し秋はいろ〳〵の花にそありける

もゝ草の花のひもとく秋の野に思ひたはれむ人なとかめそ

月草に衣はすらむあさ露にぬれてのちはうつろひぬとも

仁和のみかとみこにおはしましける時ふる
のたき御覧せんとておはしましけるみち
に遍昭かはゝのいへにやとりたまへりける
時に庭を秋の野につくりておほん物
かたりのついてによみてたてまつりける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにしやとなれや庭もまかきも秋ののらなる

古今和哥集巻第五

秋哥下

これさたのみこの家の哥合のうた

文屋やすひて

吹からに秋の草木のしをるれはむへ山風をあらしといふらん

草も木も色かはれともわたつ海の浪の花にそ秋なかりける

秋の哥合しける時よめる

紀よしもち　淑望

紅葉せぬときはの山は吹風のをとにや秋をきゝわたるらん

題しらす

よみ人しらす

霧たちて雁そ鳴なる片岡の朝の原は紅葉しぬらん

神無月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神なひの森

ちはやふる神なひ山のもみちはに思ひはかけしうつろふ物を

貞観御時綾綺殿のまへに梅の木あり
けり西のかたにさせりける枝のもみち
はしめたりけるを上にさふらふをのこと
ものよみけるついてによめる

藤原かちおむ

おなし枝をわきて木葉のうつろふは西こそ秋のはしめなりけれ

いし山にまうてける時音羽山のもみちを見てよめる

つらゆき

秋風の吹にし日より音羽山峯のこすゑも色付にけり

これさたのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

白露乃色ハひとつをいかにして秋乃このはをちゞにそむらん

壬生忠岑

秋の夜乃露をハつゆとおきなからかりの涙や野へをそむらん

題しらす

よみ人しらす

秋乃露色ゝことにをけはこそ山のこのはのちくさなるらめ

もる山のほとりにてよめる

つらゆき

白露も時雨もいたくもる山ハ下葉のこらす色つきにけり

秋の哥とてよめる

在原元方

雨ふれと露ももらしをかさとり乃山ハいかてかもみちそめけん

神のやしろのあたりをまかりける時にいかきのうちのもみちをみてよめる

つらゆき

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり

これさたのみこの家乃哥合によめる

たゝみね

雨ふれはかさとり山のもみちはゝゆきかふ人の袖さへそてる

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらす

ちらねともかねてそおしき紅葉ハ今ハかきりの色とみつれは

やまとのくにゝまかりける時佐保山にきりのたてりけるをみてよめる

きのとものり

たかための錦なれはか秋霧のさほの山へをたちかくすらん

これさたのみこの家の哥合のうた

よみ人しらす

秋霧はけさはなたちそさほ山のははそのもみちよそにても見ん

秋の哥とてよめる

坂上これのり

さほ山のははそのいろはうすけれと秋はふかくもなりにけるかな

人のせむさいにきくにむすひつけてうへける哥

在原なりひらの朝臣

裁しうへは秋なき時やさかさらん花こそちらめねさへかれめや

寛平御時きくの花をよませたまうける

としゆきの朝臣

久方の雲のうへにてみる菊はあまつほしとそあやまたれける

このうたはまた殿上ゆるされさりける時にめしあけられてつかうまつれるとなん

これさたのみこの家の哥合のうた

きのとものり

露なからおりてかさゝん菊の花おいせぬ秋のひさしかるへく

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

大江千里

裁し時花まちとをにありし菊うつろふ秋にあはんとやみし

おなし御時せられける菊あはせにすはまをつくりて菊の花うへたりけるにくはへたりける哥ふきあけのはまのかたに

こゝに菊うへられけるによめる

すかはらの朝臣 延喜元年左遷 贈従一位 太政大臣

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまに早晩ちとせを我はへにけん

菊の花のもとにて人のひとまてるかたをよめる

とものり

花見つゝ人待時は白妙の袖かとのみそあやまたれける

おほさはの池のかたに菊うへたるをよめる

ひともとゝおもひし菊をおほさはの池のそこにもたれかうへけん

世の中のはかなきことをおもひけるおりに

菊の花を見てよめる

つらゆき

秋の菊にほふ限はかさしてん花よりさきとしらぬ我身を

白菊の花をよめる

凡河内みつね

心あてにおらはやおらん初霜のおきまとはせる白菊の花

これさたのみこの家の哥合のうた

よみ人しらす

色かはる秋の菊をはひとゝせにふたゝひにほふ花とこそ見れ

仁和寺に菊の花めしける時に哥そへてたてまつれとおほせられけれは

よみてたてまつりける

平さたふん

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされは

人の家なりける菊の花をうつしうへたりける

をよめる　　つらゆき

さきそめし宿しかはれは菊の色さへにこそうつろひにけれ

題しらす　　よみ人しらす

さほ山のはゝその紅葉ちりぬへみよるさへみよとてらす月

宮つかへひさしうつかうまつらて山さとにこもり侍

けるによめる

奥山のいはかき紅葉ちりぬへしてる日のひかりみる時なくて

藤原関雄　治部少輔　五位

題しらす　　よみ人しらす

龍田河紅葉みたれて流めりわたらは錦中やたえなむ

此哥はある人ならの御門の御哥也（文武天皇）

となむ申す

たつた河もみちはなかる神なひのみむろの山にしくれふるらし

又はあすか河もみちはなかる　　此哥不注人丸哥　他本ニ又同

こひしくはみてもしのはむもみちはを吹なちらしそ山おろしの風

秋風にあへすちりぬるもみちはのゆくへさためぬ我そかなしき

秋はきぬ紅葉はやとにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

ふみわけてさらにやとはむもみちはのふりかくしてし道とみなから

秋の月山へさやかにてらせるはおつるもみちのかすをみよとか

吹風の色のちくさにみえつるは秋のこのはのちれはなりけり

せきを

霜のたてつゆのぬきこそよはからし山の錦のおれはかつちる

うりんゐんの木のかけにたゝすみてよみける
僧正へんせう
わひ人のわきて立よる木のもとはたのむかけなく紅葉ちりけり
二條の后の東宮のみやす所と申ける時
に御屏風にたつた河にもみちなかれたるかた
をかけりけるを題にてよめる
そせい
もみちはのなかれてとまるみなとには紅深き浪やたつらん
なりひらの朝臣
ちはやふる神代もきかすたつた河唐紅に水くゝるとは
これさたのみこの家の歌合のうた
としゆきの朝臣

わかきつる方もしられすくらふ山木々のこのはのちるとまかふに
たゝみね
神なひのみむろの山を秋ゆけは錦たちきる心ちこそすれ
よめる
つらゆき
見る人もなくてちりぬる奥山のもみちはよるの錦なりけり
秋のうた
かねみの王
龍田姫たむくる神のあれはこそ秋のこのはのぬさとちるらめ
をのといふところにすみ侍ける時もみちを
見てよめる
つらゆき
秋の山もみちをぬさとたむくれはすむ我さへそ旅心ちする
神なひの山をすきて龍田河をわたりける

時にもみちのなかれけるをよめる
きよはらのふかやふ
神なひの山を過行秋なれは竜田河にそぬさはたむくる
寛平御時后の宮の歌合のうた
ふちはらのおきかせ
白浪に秋のこのはのうかへるをあまのなかせる舟かとそみる
竜田河のほとりにてよめる
坂上これのり
もみち葉のなかれさりせは竜田河水の秋をはたれかしらまし
志賀の山こえにてよめる
はるみちのつらき
山河に風のかけたるしからみは流もあへぬもみちなりけり

池のほとりにてもみちのちるをよめる
みつね
風ふけはおつるもみちは水きよみちらぬかけさへそこにみえつつ
亭子院の御屏風のゑに河わたらむとする人のもみちのちる木のもとに馬をひかへてたてるをよませ給けれはつかうまつりける
立とまりみてをわたらむもみちはは雨とふるとも水はまさらし
これさたのみこの家の歌合のうた
たたみね
山田もる秋のかりいほにおく露はいなおほせ鳥の涙なりけり
題しらす
よみ人しらす
ほにもいてぬ山田をもると藤衣いなはの露にぬれぬ日そなき

かれる田におふるひつちのほにいてぬは世を今更に秋はてぬとか
北山に僧正遍昭とたけかりにまかれりける
によめる
そせい
もみちはは袖にこきいれてもていてなむ秋は限と見む人のため
寛平御時ふるき歌奉らせ給ひける時
竜田河もみちはなかるといふ歌をかきて
そのおなし心をよめりける
おきかせ
み山よりおちくる水の色見てそ秋は限と思ひしりぬる
秋のはつるこゝろをたつた河に思ひ
やりてよめる
つらゆき
年ことにもみちはなかすたつた河みなとや秋のとまりなるらん

なか月のつこもりの日大井にてよめる
つらゆき
ゆふつくよをくらの山に鳴鹿の声のうちにや秋はくるらん
おなしつこもりの日よめる
みつね
みちしらはたつねもゆかむもみちはをぬさとたむけて秋はいにけり

古今和歌集巻第六

冬歌

題しらす　よみ人しらす

竜田河錦おりかく神な月しくれの雨をたてぬきにして

冬のうたとてよめる　源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは

題しらす　よみ人しらす

おほそらの月のひかりしきよけれは影みし水そまつこほりける

夕されは衣手さむしみよしのの吉野の山にみ雪ふるらし

今よりはつきてふらなん我宿のすゝきをしなみふれる白雪

ふる雪はかつそけぬらしあしひきの山のたきつせをとまさる也

この河にもみちはなかるおく山の雪けの水そ今まさるらし

ふるさとは吉野の山しちかけれはひと日もみ雪ふらぬ日はなし

わか宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなけれは

冬の哥とてよめる　紀貫之

雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そさきける

しかの山こえにてよめる　紀あきみね

白雪の所もわかすふりしけはいはほにもさく花とこそ見れ

ならの京にまかれりける時にやとれりける所にてよめる　さかのうへのこれのり

みよしのの山の白雪つもるらしふる里さむくなりまさるなり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ふちはらのおきかせ
浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとそみる
壬生忠岑
みよしのゝ山の白雪ふみわけて入にし人のをとつれもせぬ
白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらん
ゆきのふりけるをみてよめる
凡河内みつね
雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらん
ゆきのふりけるをよみける
きよはらのふかやふ
冬なからそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん
雪の木にふりかゝれるをよめる
つらゆき
冬こもり思ひかけぬをこのまより花とみるまて雪そふりける
やまとのくにゝまかれりける時に雪のふりけるを
見てよめる　坂上これのり
朝ほらけ有明の月とみるまてによしのゝ里にふれる白雪
題しらす　よみ人しらす
けぬかうへに又もふりしけ春霞たちなはみ雪まれにこそみめ
梅花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝは
この哥ある人のいはく柿本人丸か哥也
梅の花に雪のふれるをよめる
小野たかむらの朝臣
花の色は雪にましりてみえすともかをたにゝほへ人のしるへく

ゆきのうちの梅花をよめる

きのつらゆき

梅のかのふりおける雪にうつりせはたれかことことわきておらまし

ゆきのふりけるをみてよめる

きのとものり

雪ふれは木ことに花そさきにけるいつれを梅とわきておらまし

ものへまかりける人をまちてしはすのつこもりによめる

みつね

我またぬ年はきぬれと冬草のかれにし人はおとつれもせす

としのはてによめる

在原元方

あらたまの年のおはりになることに雪もわか身もふりまさりつゝ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらす

雪ふりて年のくれぬる時にこそつゐにもみちぬ松もみえけれ

としのはてによめる

はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすか河なかれてはやき月日なりけり

哥たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

きのつらゆき

行年のおしくもあるかなますかゝみみるかけさへにくれぬとおもへは

古今和歌集巻第七

賀歌

題しらず　　よみ人しらず

わが君は千世にやちよにさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

わたつ海の浜のまさごをかぞへつゝ君がちとせのありかずにせん

しほの山さしでの礒にすむ千鳥君がみ世をばやちよとぞなく

わがよはひ君がやちよにとりそへてとゞめおきては思ひいでにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀たまひける時の御うた

かくしつゝとにもかくにもながらへて君がやちよにあふよしもがな

仁和のみかどみこにおはしましける時に御をばのやそぢの賀にしろかねをつゑにつくれりけるを見てかの御をばにかはりてよめる　　僧正へんせう

ちはやぶる神やきりけむつくからに千とせの坂もこえぬべらなり

照宣公　貞観十四年右大臣廿九左大将　十七年四十

ほりかはのおほいまうちぎみの四十賀九条の家にてしける時によめる　　在原業平朝臣

桜花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに

貞辰　清和第七

さだときのみこのをばのよそぢの賀を大井にてしける日よめる　　きのこれをか　或説云 惟遜 ［illegible］

かめのをの山のいはねをとめておつる滝の白玉千世のかずかも

貞保　二品式部卿　清和第二　号南宮　母二条后　延長二年薨

さだやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりて

おなし御屏風にさくらの花のちるしたに
人の花見たるかたかけるによめる

藤原おきかせ

いたつらにすくる月日はおもほえて花見てくらす春そすくなき

本康 仁明第七 一品式部卿 号八条宮 延喜元年薨 母従四下上 紀種子 名虎女
もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける

きのつらゆき

春くれはやとにまつさく梅花君か千とせのかさしとそみる

そせい法師

いにしへにありきあらすはしらねとも千とせのためし君にはしめむ

ふしておもひおきてかそふる万代は神そしるらむわか君のため

藤原三善か六十の賀によみける

在原しけはる

つるかめも千とせの後はしらなくにあかぬ心にまかせはててむ

この哥はある人在原のときはるか共いふ

よしみねのつねなりかよそちの賀にむすめにかはりてよみ侍りける

そせい法師

よろつ代をまつにそ君をいはひつる千とせのかけにすまむと思へは

満子 内大臣高藤二女 本美良延喜聖主 延喜十七年 従二位
大納言 右大将 定国 延喜六年 同年七月薨 四十
内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十の賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた

かすかのにわかなつみつつ万代をいはふ心は神そしるらん

山たかみ雲井に見ゆるさくら花心のゆきておらぬ日そなき

夏

めつらしき声ならなくにほとときすここらの年をあかすも有かな

秋

住の江の松を秋風吹からに声うちそふるおきつ白浪

千鳥なくさほの河きり立ぬらし山のこのはも色まさり行

秋くれと色もかはらぬときは山よその紅葉を風そかしける

冬

白雪のふりしく時はみよしのゝ山した風に花そちりける

春宮のむまれ給へりける時にまゐりてよめる（文彦太子 保明親王 延喜三年誕生 四年二月十日立太子 十六年十月元服 廿三年三月薨 廿一）

典侍藤原よるかの朝臣

みねたかきかすかの山にいつる日はくもる時なくてらすへきなり

古今和歌集巻第八

離別歌

題しらす　在原行平朝臣

立わかれいなはの山の峯におふるまつとしきかは今かへりこん

よみ人しらす

すかる鳴秋の萩原あさたちて旅行人をいつとかまたん

限なき雲井のよそに別るとも人を心におくらさむやは

をのゝちふるかみちのくのすけにまかりける時にはゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心はかりはせきなとゝめそ

さたときのみこの家にて藤原のきよふ（清生）かあふみのすけにまかりける時にむまのはなむけしける夜よめる

しける夜よめる　きのとしさた

けふ別あすはあふみとおもへとも夜やふけぬらん袖の露けき

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけと春霞立別なはこひしかるへし

人のむまのはなむけにてよめる

きのつらゆき

をしむから恋しき物を白雲のたちなむ後はなに心ちせん

ともたちの人のくにへまかりけるによめる

在原しけはる

別ては程をへたつとおもへはやかつ見なからにかねて恋しき

あつまのくにへまかりける人によみてつかはし
ける

いかこのあつゆき

思へとも身をしわけねはめにみえぬ心を君にたくへてそやる

相坂にて人をわかれける時によめる

なにはのよろつを　万雄

あふさかの関しまさしき物ならはあかす別るゝきみをとゝめよ

よみ人しらす

唐衣たつ日はきかし朝露のおきてしゆけはけぬへきものを

この哥はある人つかさをたまはりてあたらし
きめにつきて年へてすみける人をすて
てたゝあすなむたつとはかりいへりける
ともかくもいはてそよみてつかはしける

ひたちへまかりける時に藤原のきみとし
によみてつかはしける

或本に此段有

寵

あさましけにみやこ君とし給へるは思ひもかけぬ事なりけり
きぬひきさうちあつき人々まゐりあふ時に人の
ここにやりくわろきいてきたりしそありける中
これし思ひもとめくさせりけれ
なんといひしそ
え世をこりの今はみよいのちあらは秋やはしらぬ人やとひくる
あひしらぬ物ありし人のあつまりけるへさけり
あれといふなかして よみける
かへし
雲井にもかよふ心のかきくれはいかなる人よ見ゆらめ
ものあつさへまゐりけるによめる

よしみえのひそかなる
白雲のたなひく今日に立別れ心ぬさともたむく旅哉
これぬきへまゐりける人によみそめたる
けり
つらゆき
白雲のやへにかさなるをちにてもおもはん人に心へたつな
人よりれしありける時によみける
これて事ありしもあるにみちにてよしみるを
あひしれりける人のこのくにへまかりて
年へて京にまうてきたるにかのうへの時に
よとか
凡河内みつね
海山をへたてゝ有しかひともまたもみん君には さらに
こしのくにへまかりけるにみそてにつきし

かへし

よそにのみ恋やわたらん白山のゆきみるへくもあらぬわか身は

おとはの山のほとりにて人をわかるとて
よめる　つらゆき

おとは山こたかく鳴て郭公君か別を惜くへらなり

藤原ののちかけか唐物の使に長月の
つこもりかたにまかりけるに上のをのこ
ともさけたうひけるついてによめる

藤原兼茂　延長元年卒

もろともに鳴てとゝめよきり〳〵す秋の別はおしくやはある

平元規　元規 蔵人 右衛門尉

秋きりのともに立出て別なははれぬ思に恋やわたらん

源のさねかつくしへゆあみむとてまかりける
時に山さきにて別おしみける所にてよめる

しろめ

いのちたに心にかなふ物ならは何か別のかなしからまし

山さきより神なひのもりまておくりに人々
まかりてかへりかてにして別おしみけるに
よめる　源さね　右近蔵實

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりなん

今はこれよりかへりねとさねかいひけるおりによみける

藤原かねもち

したはれてきにし心の身にしあれはかへるさまには道もしられす

藤原のこれをかむさしのすけにまかりける

時はなかりしにあまさかりはゆかそらにして人なる

作りゆき

かくれて月をゆかり相坂は人よりあかれは君に不有れ

おほえ乃よ侍りしく人かりあるはもりの

まれむけるよゆかる

藤原のよすけの朝臣

春りうみね山花桜も雪かまにちりは人の花山よりそしきくゆきつりかさそら

なしとしあれは時よりなり

僧正へんせう

ゆきかりし山をみなと花は夜をうきとやちるらん

山よりのかりて出りさきてし人てちる

時つかそよまさは 幽仙法し

別といふ山乃桜はまかれ人をたしと思ふは花のまさるらん

うかし山の人のみされ今別とよ山よのかりて

そりあは桜乃られののふてよ咲なん

僧正へんせう

山乃桜咲きみて花のさかれはちるらく

幽仙法し

こなゝいきを思ふてにかへる南から花の色をやかる

に和のみと見こにゆかし思ひけるはよこなれ

のさき花りよれしまとそらくり花なる

兼藝法し

よよめる

あかしてつら瀬瀧よちる水さゆらとや志まのみ歌

みなりのつほにめしたりける日おほみき
なとたうへて雨のいたくふりけれは夕さりま
て侍りてまかりいてけるをりにさかつきをとり
て　　　つらゆき
秋萩の花をは雨にぬらせとも君をはましてをしと思
とよみけるかへし
　　　兼覧王
惜むらむ人の心をしらぬまに秋の時雨と身そふりにける
兼覧王にはしめて物かたりして別
れける時によめる　　みつね
わかるれとうれしくもあるかこよひよりあひみぬさきに何をこひまし
題しらす　　よみ人しらす

あかすしてわかるゝ袖の白玉を君かかたみとつゝみてそゆく
限なく思涙にそほちぬる袖はかはかしあはむ日まてに
かきくらしことはふらなむ春雨にぬれきぬきせて君をとゝめむ
しゐて行人をとゝめむ桜花いつれを道とまとふまてちれ
しかの山こえにていしゐのもとにてものいひける
人のわかれける折によめる
　　　つらゆき
むすふ手のしつくににこる山の井のあかても人にわかれぬるかな
みちにあへりける人の車にものをいひつきて
わかれける所にてよめる
　　　とものり
したのおひのみちはかたかたわかるともゆきめくりてもあはむとそ思

古今和哥集巻第九

羇旅哥

もろこしにて月を見てよみける

安倍仲麿

あまの原ふりさけみれはかすかなる三笠の山にいてし月かも

このうたはむかしなかまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるにあまたのとしをへてえかへりまうてこさりけるをこのくにより又つかひまかりいたりけるにたくひてまうてきなむとていてたちけるにめいしうといふ所のうみへにてかのくにの人むまのはなむけしけりよるになりて月のいとおもしろくさしいてたりけるを見てよめるとなむかたりつたふる

おきのくにゝなかされける時に舟にのりていてたつとて京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

わたの原やそしまかけてこきいてぬと人にはつけよあまのつり舟

題しらす

よみ人しらす

都いててけふみかの原いつみ河かは風さむし衣かせやま

ほの〳〵とあかしの浦の朝霧に島かくれゆく舟をしそ思ふ

この歌はある人のいはく柿本人麿か歌也

あつまの方へともとする人ひとりふたりいさなひていきけりみかはのくにやつはしといふ所に

ところはやつはしなりあれなるかはのほとりに
かきつはたいとおもしろくさきけるを見て
木のかけにおりゐてかきつはたといふ五文字を
と句のかみにすへてたひのこゝろをよめといひけれは
よめる

在原業平朝臣

唐衣きつゝなれにしつましあれははるはるきぬる旅をしそ思ふ
むさしのくにとしもつふさのくにの中に
あれすみたかはのほとりにむれゐて
こひしうたはしあれいたはしくおもひ
みて思ひやれはかきりなくとほくもきにける
かなとわひあへるにわたしもり
これや此のはや舟にのれ日もくれぬといふに舟に

二字下本行に私注

のりてわたらんとするにみな人ものわひしく
て京に思ふ人なきにしもあらすさるをりに
きとりのはしとあしとあかきしきのおほきさなる
あそひけり京にはみえぬとりなりけれはみな
人しらすわたしもりにとひけれは
これなむみやことりといひけれは
よみてよめる
名にしおはゝいさこと問はむ都鳥わかおもふ人はありやなしやと
とよみけれはふねこそりて
みやこ鳥なるにつれてなきにけり
このうたあれ人もとめて人あるいは
人のくにまてありかきさまよひいたりく

すなはち身まかりにければ女ひとり京へ
かへりけるみちにかへる雁のなきけるをききて
よめるとなむいふ
あつまのかたより京へまうてくとてみちにて
よめる　おと　壬生ますなりか女
山かくす春の霞そうらめしきいつれ都のさかひなるらん
こしのくにへまかりける時しら山を見て
よめる　みつね
きえはつる時しなけれはこしちなる白山の名は雪にそ有ける
あつまへまかりける時みちにてよめる
つらゆき
いとによる物ならなくに別路の心ほそくもおもほゆるかな
甲斐のくにへまかりける時みちにてよめる
みつね
夜をさむみおく初霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝひねぬ
たちまのくにのゆへまかりける時ふたみのうら
といふところにとまりてゆふさりのかれいひたうへ
けるにともにありける人々のうたよみけるついてに
よめる　ふちはらのかねすけ
ゆふつくよおほつかなきを玉くしけふたみの浦はあけてこそみめ
これたかのみこのともにかりにまかりける時にあま
のかはといふ所の河のほとりにおりゐてさけなと
のみけるついてにみこのいひけらくかりしてあまの
かはらにいたるといふ心をよみてさかつきはさせといひ

けれはよめる　　在原業平朝臣

かりくらし織女にやとからん天の河原に我はきにけり

みこ此うたをかへすかへすよみつゝかへしえせすなりにけれは
ともにはへりてよめる

きのありつね

ひとゝせにひとたひきます君まてはやとかす人もあらしとそ思ふ

朱雀院のならにおはしましたりける時にたむけ山にてよみける

すかはらの朝臣

このたひはぬさもとりあへすたむけ山紅葉の錦神のまにまに

素性法師

たむけにはつゝりの袖もきるへきにもみちにあける神やかへさん

古今和歌集巻第十

物名

うくひす　　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん

ほとゝきす　　おなし

くへきほと時すきぬれや待わひてなくなる声の人をとよむる

うつせみ　　在原しけはる

浪のうつせみれは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからんや

同し　　壬生忠岑

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなんそれとうつせみんかし

うめ　　よみ人しらす

あなうめにつねなるへくもみえぬかなこひしかるへきかはにほひつゝ

うかゝる　つゆき
かつきも浪のなにはさくらかく風ハひとしにほひ江
すゝ乃くれ
いさくゝ春かくれはくしすもれぬをそやまつらむ
つゆのふゝ　ふかや弟
あつらふれたちなみみれは人事なくて思ひ
そちられ　せ乃しけ弟
筆乃山ちけるありやものやりさるめ世にちある
とゝさしれま　ともなり
みすしめ吉野の跡ようはうつあつ跡の玉葉も毎とこ
やさうきれま　しみむしゝあ　つん
秋はきめ今やまうにぬきりてらにれくなうむ風乃やむさた

あつしらる
かくはりあらしぬされしな殿人とゐたりしおりしもゝき
人めゆ人ねよあるもみれけりきくゝいまつゝきこまやとふかゝ遊
なさに　信四つ人まう
なりぬれはなちはあくるにたちる花とまてらはもゆるさ寐
ゆるし　つゆき
我はけさうしいたみるつ世の道はあつれるの袖とこそやり
かとみれて　ともなり
白露とまよぬくゝやたかつきの花にも紫あとつはひ返し
朔ありなとまはけちいはちつ荻人と今うれ山とそれつゝめ
朱花はのうるんたゝてあくせ乃けよかさはれて
とてふいれなしはくれてしこれまきてよみならむ

かゝる山人も見たらめかし鳴鹿にへよきん秋とも聞へ今はき　つゆき

きらゝかれ　もめり

あまたゝりぬれはより白露のさけり草葉もきらり中く

立かよ　しみひし秋

うりくくいさ伸きよれ花みんとおもはなひそろひけ

見えし人あれ　もめり

秋やとぬ花つゝ毎くとりうたんのいおもれはや立ちも

おくれ　しみくしとも

有とみそよの山ふゝ池宅嫁の世といふしや思ふなん

またせし　やよいの君実　矢田部

池つきにうりや花乃多はみんとく白露の深つりと

二條の居まろとの月やすむとくろと戸けつとはよ

め池よけつり花させりつのはよまぜせさむ

あり　文宜のやすむく

花の末にあら花はも咲はり帰りこよみなめの時まか

しのふくさ　きれとしきる

山ろとつ見にありし月雨けといふあひもあらと花ちろけつ

やまし　辛あつゆき

新玉宇よのさよやまよ中にうあろはまけとみなうしまな　未

うつけま　しく人しす

宅嫁のつ日すよにとしまさとき雪中く立はとあちかき

かくれくさ　うやね

はる花の夢になよつれいめさ雪んつはにもあつめ色と

さりとけ　さうしいぬらしけり　高向

萩乃色ハあかひとゆかり也迄もめてす露ハ花めける

よろけ　しきさへ

いのちも露をたのむよかな露の玉松にしらく鳴の人の世

かさけ　けりの月やなほよ人

さ本すけくたをはけゆく人なれ月時の人そ林乃正せ

もろし　忘ひせいはし

旅ならゆめもみてめ草風の根ならしもとまつきぬ人

けく　まれ　ひも　けさを吉

きのさうと

いさゝめ小時まつりにうひいつめるへきせとはい人のみてはく

なし　まつめ　くろ見

兵衛　こふさつしにぬけり

あらきらし　なまひれつかそこきかよ花てゆみをいすそ嵐

うこ永く亭時もそ春風らけの日よわる

安信清紗朝臣

浪のをぬけとかからまき出事ハ春風さへや　あなたのるん

いさゝき　無見

めらにあらか浪の音もそ春陽ハいさやきらの花をみさらん

かうさき　あかあのつねさ　阿保経覧

うれ千にいつゝ事に波の人時に浪もひゝ

行教

浪の花ハたちゝ事そちくめ水ぬ春とハ風やまつん

うみやかて　つゆき

またな見ろくもゝやかはらん鏡のうけよ咲かしら雪
もしは
是ぞ此上ふたりなき白きものにもまさりて何なき
こうれ　さく
夜寒の人いこ来にけまる雪水のゆきる紙やぶれ
こうてのみや　　　源はじめ　忠
秋くれと月のうつりゆくやいはかにいふ花とちりて行を
百和香　　　しみじみとす
花とにあはれちりし風の音ははやけはれつうしように　やすみ
すみなりし　　　まけゝる
春花なかしりにちれるをは秋くはかりいくつきたし
おもき大人　　　みやこのよりのり　都良香

流るゝかはにみえぬ瀬川なきみん人はやさこいこそ人
ちまき　　　大江千里
めづらしきいろそれなくやつるなるなとわきになきぬものをそ
けふそ見えし色くそしまくたゝ見えそけさく
時の苗のよろしく人のいふなれしみけれ　　僧正遍昭
花のなりめにあふやそよけゆきはやうよしにちるめてこ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　なりひら

古今和哥集巻第十一

恋哥一

題しらす　　よみ人しらす

郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

素性法師

おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへすけぬへし

紀貫之

吉野河いはなみ高くゆく水のはやくそ人を思ひそめてし

藤原勝臣

白波のあとなき方にゆく舟も風そたよりのしるへなりける

在原元方

おとは山をとにきゝつゝ相坂の関のこなたに年をふるかな

立帰りあはれとそ思ふよそにても人に心をおきつ白波

つらゆき

世中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人もこひしかりけり

右近のむまはのひをりの日むかひにたてたりける車のしたすたれより女のかほのほのかに見えけれはよみてつかはしける

在原業平朝臣

見すもあらす見もせぬ人のこひしくはあやなくけふやなかめくらさむ

返し　　よみ人しらす

しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみこそしるへなりけれ

をりある　今のころのよ
かすかのゝ雪消えてかへらいて若菜つみにと君も
人の花ぞしけるゆへさりともこそありける
思はれてものちにしそつくる夢哉
了伊秀
山桜霞のころりかのにも見てし人はさそふられ
花ちりにものあらめ思ひあやしき心は人まつ夜哉
悲しくと
とりぬるつに鮮と聞しりたりけるやにのとおもひ果
元河内冬子
逢事は雲井のはるの朝風よとはさきつつ恋すまか
法ゆき

よみしゝに
かゝる比とかゝるにはりけるあくれは何と玉枕にさん
ゆふくれは雲のまよひてにほふなり雨ぞ流るゝ人とこそ
かりにもみかりにえてなく秋子とも世る人しつきすは
時世をたまき人よやねぐくら露のねくといふけき姫は君か見ん
ちはやふる神かも秋のゆふくすし見しにも君のかけぬ日は逢
秋恋はむかしきえにみちぬる思ひやまとも見てする
するかの富士の煙をたゝぬ日はあれとも君にこそあはめ
中々よかりしやおもへる松の葉に人のつゝもと思ひぬ恋をもするか
逢見ての後のたゞ水の泡のなく流れゆく浅せにうつる月いるか
三吉野河にえきりとかけもり水のをしいかそて恋しぬるも
流つき夜中にもよはありてつれなき秋恋のわかせもせん

山里にてゆく水の下にはの流るゝこゝろもしらしぬるも
思ひけるは人の心のはてつゆいつはりなれはおもひきりなむと
人言はしと思へはふかく紅の末つむ花の色にいてすは
秋の夜のおもひを胸にまつ花の色やことしも年に替る
ふるさとの梅の香はつゆに薫れるねよたまきかへ来恋もすらむ
あし引の山郭公ほのかにや君とし恋はゆくそこのまことに
夜なかはやしら鳥の声のやみのうつそこかたもとに
恋をしと人をし何よりも人を恨みはけすて成よりしと
あやしき事になくは何ともいはむ恋の人のあつゐなきに
なふよりの心のつまをけふきの色にいひてしと思ふも我を
秋恋と人志をめやしきたる人の袖のこうらしかは志きため
あさ夕の人とぬしの原の子のも人三代やまた人ある

人しれぬ恋すやはしと書かよはしつけ逢事も難き
思ふこともいふもあはす人物なれやゆまてもたゆく思ひ出も
いてよなし人の哀そめし私は舟の中に流れそゆくに物思ひしられ
信夫わすれよつりにし佐けれ世やみしつとゆくそむつる
いせの海のあまのつりなれ打よせくるもとめぬ人や思ふらん
瀬川ならは人の袖とよ人知る物思ふ時の心かなしわかる
なにもあはていくたひも杉のはのよそれ恋すことはゝ人にやも
あれし立河霧のこよゐのこえきそ思ひの世に母たちけるも
日すゑの思ひなきもあはれ思ひてよしく程とのつよき鳴
唐衣山もゆふかれにしたちをはへらるらん人は恋しき
よ衿よ枕さゝめ世本まれいとは鶴よりも夢ゆゑ人
こゝろまくにいのちは残りつゝ物なすは志んやしくつあるかはる
人のかくさすも身しのはあるすてもいさめの人恋やしめゆ

夢の迷ひくらしけるに人もすゑを夢としりけれはかなし
この世をもいやしき身もまつよりほかの人を尊くおもへ
つねにとき人とこそおもひしに出家するまてあはれなり
ゆくすゑのしらぬ身のはてにおもひしはなき人を思ひやり
人となりへてんにあひたるやうの迷いにしけるかな
思ひやるかひはなくて成ゆくまゝに夢にも人の跡
夢の内に逢見し人の面かけのみ残りける夢にも人の跡を
とゝめすへき事もなしとおもひしに夢もかなしき身をはな
邯鄲の枕なることをしりては夢もさめぬへくそなけれ
このすゑは猿丸かけと成けるさきの人のまちはなち出
舞人にあひまみえぬるもかく激の河よりさきのかたに
うきよの身を今すみそめにし流てさすらひの身なれは

いやしき身なれとも人をはゝからすいみしくいはゆる大臣の
おきなくもまさのなかにわかれしを人々おほくのやさしかりけん
あはれとも人にしられぬいはのうへにてはひとりいはむ人をもとめむ
人しれす世をうらみてよろつの山にこもり侍れ
とふらはれ心もちて奥山のつきにのほりて
桐壺の中宮をしたてまつり人やさらにまいりてはしらん
あふさかの関をこえて水のうへにやとりけれ
うき草のことくさまよひて関のあやしき所にかゝり
すみかとは世をうらみてなかく山にすみてこの身
なくすみかもかへりみはて見るも人の世を
しらすして迷ひの道にも心をよせてふかく山に入
ましてつきゆき影もさえていよいよあはれなりけり

あけたては蝉のをりはへ鳴くらし夜は螢のもえこそわたれ

夏むしの身をいたつらになす事もひとつ思ひによりてなりけり

ゆふされはいとゝひかたき我袖に秋の露さへをきそはりつゝ

いつとても恋しからすはあらねとも秋の夕はあやしかりけり

秋の田のほにこそ人を恋さらめなとか心にわすれしもせん

秋の田のほのうへをてらす稲妻のひかりのまにも我やわするゝ

人めもる我かはあやな花すゝきなとかほに出て恋すしもあらん

あは雪のたまれはかてにくたけつゝ我物思ひのしけきころかな

おく山のすかのねしのきふる雪のけぬとかいはん恋のしけきに

古今和歌集巻第十二

恋歌二

題しらす　　小野小町

おもひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

いとせめて恋しき時はむはたまの夜の衣をかへしてそきる

素性法師

秋風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝ夜ことに

しもついつもてらに人のわさしける日真せい法しのたうしにていひける事はを哥によみて小野小町かもとにつかはせりける

あへのきよゆきの朝臣

つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり

返し　　こまち

おろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへすたきつせなれは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原としゆきの朝臣

恋わひて打ぬるなかにゆきかよふ夢のたゝちはうつゝならなん

住の江の岸による浪よるさへや夢のかよひち人めよくらん

をのよしき

わか恋はみ山かくれの草なれやしけさまされとしる人のなき

紀とものり

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまとひまされる恋もするかな

ゆふされは蛍よりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき

さゝの葉にをく霜よりも独ぬるわか衣てそさえまさりける

我やとの菊のかきねにをく霜のきえかへりてそ恋しかりける

河の瀬になひく玉もの水かくれ人にしられぬ恋もするかな

みふのたゝみね

かきくらしふる白雪の下きえにきえて物思ふころにもあるかな

藤原おきかせ

君こふる涙のとこにみちぬれはみをつくしとそ我はなりける

しぬる命いきもやすると心みに玉の緒はかりあはんといはなん

わひぬれはしゐてわすれんと思へとも夢といふ物そ人たのめなる

よみ人しらす

わりなくもねてもさめても恋しきか心をいつちやらはわすれん

恋しきにわひてたましゐ迷ひなはむなしきからの名にやのこらん

きのつらゆき

君こふる瀬ゝハ唐衣ひのわりなくもきえぬへし
思しらす

世をもいとひてすむ瀬川みなもとハ人をまちつゝ
身ひとつをなきやかなしき思ひわかれの袖のしらつゆ
たせは流し

はかなくて夢にも人を見つるよは朝の床そおきうかりける
ちはやのさつき

うつり行瀬ゝのあはれは衣しのゝめの袖ハかはくまもなし
大江千里

移るよりそひてゆきしもきえ尽ぬるはかなさは河世のつゆ
しゆきの露を

まきもくのひのやまことも見えぬかもくもまになくや鳴なん
つらゆき

夕月山にすまきたゝみ鹿も鳴をりはかりすそもすゝれ
九河ゆかりの

秋霧の人かる時ふきさしつゝよいたちみれはちる袖はれぬ
清原元輔

しのゝめの露よたてゝいたりのも瀬ゝにしけしなきかせ
これさそもこれのすかたのゆき
よみ人しらす

秋の夜ハ山とよむしもて鳴鹿の独ねさりけるや独ねるよい
題しらす
つらゆき

秋の野にみたれてさける花の色のちくさに物を思ふころかな

しくれ　田

独てよの寝覚ハ秋の夜乃いたくのうしてふへの寝　歎
あやね
人よ契る心ハ離よあらねとも雲井にの人も鳴渡れ
さよ哉
秋風のかきたへしよ衣新にしへ何所への心しらん
つゆさ
海をもわたりよ袖さいはる雲井ハ常ならぬしにけり秋恋
やまとよ契りし人よつけはまする
こゝあけはのしめし山乃桜花今てもめく関もあれ
やよひちりにかぬたりひける人乃花よ又
人まりつせくちこすきてしそつは

寄風

露なりぬ心花よなきさこうめく風吹しよ如思うなく
待子　媚之これの
秋恋よく梅の山乃桜花ちりくちれしも時すなれ
しのひなれしり
名月乃くいに出る秋をもやしたは清てこひとらん
さく哉
御恋にはそしくめの恨辛れいそこの恋も秋かける
とくり
よ恋くよねそてよるめ時衣かきそにおとあ隣のまよは
あつもられさやのま山まてしにゐあゆつく人を思ひやきん
まき人乃様の心に浦のあかれと人とおもつあひすそ給ふ

筆はつくさぬ思ひ有のみよはなしやいたしなり
つゆ季
我恋ハしらぬ山路にわけくらし迷ひぬるしへりける
紅の方へいてつなき涙にはなものとしらぬを浅けれ
白玉と人ハ涙も筆にかなかりぬにひろらひよ本り
月つれ
なき恋は人なりいへんいつる我も思ひよとゆるなり
こ人子
風わけは名月にうつりて白雲ハしてつれなき恋いり
月はよ我おもひをつかなさへいつれなきハ人と哀をやしく
梅やふ
恋しなれ思ひも君にいひしも世の中の常ならぬ物とおもひに涙
つゆき
はのくよ哀しも君の筆にのもけりに常に我恋人ともかや
手もかれく月日へにけるかなきらなきかはいよ移きま
人ハなき世のとまりいへる我ならぬ人の恋のかり
もの
事にいてハくわ移りかれを川さに分りてなさぬと
恋ハ移ハ移よ移り君ハ我のつく人つらかなり
見つる
さ人れ
いのちにもさいてもいく有物いみてわか恋にもあるを
これやのうゐ
移らひけん夕べか恋しく方にはりしうち涙ち乃いる

わかこひはゆくへもしらすはてもなしあふをかきりと思ふはかりそ　みつね

我のみそかなしかりけるひこほしもあはてすくせる年しなけれは　ふかやふ

今はゝやこひしなましをあひ見むとたのめし事そ命なりける　みつね

たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ　とものり

いのちやはなにそはつゆのあたものをあふにしかへはおしからなくに

古今和歌集巻第十三

恋歌三

やよひのついたちよりしのひに人にものいひてのちに雨のそほふりけるによみてつかはしける　在原業平朝臣

おきもせすねもせてよるをあかしては春の物とてなかめくらしつ

なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける　としゆきの朝臣

つれ〳〵のなかめにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし

かへし　女にかはりてよめる　なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひつらめ涙川身さへなかるときかはたのまん

題しらす
よみ人しらす

よるへなみ身をこそとをくへたてつれ心は君かかけとなりにき

いたつらにゆきてはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ

あはぬ夜のふる白雪とつもりなは我さへともにけぬへき物を

この哥はある人のいはく柿本人麿か哥也

なりひらの朝臣

秋の野にさゝわけしあさの袖よりもあはてこしよそひちまさりける

小野小町

見るめなきわか身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくくる

源宗于朝臣

あはすして今夜あけなは春の日のなかくや人をつらしと思はん

みふのたゝみね

有明のつれなくみえし別より暁はかりうき物はなし

在原元方

逢事のなきさにしよる浪なれはうらみてのみそたちかへりける

よみ人しらす

かねてより風にさきたつ浪なれやあふ事なきにまたきたつらん

たゝみね

みちのくに有といふなる名とり河なき名とりてはくるしかりけり

みはるのありすけ

あやなくてまたきなき名のたつた河わたらてやまん物ならなくに

もとかた

人はいさ我はなき名のおしけれは昔も今もしらすとをいはん

よみ人しらす

こりすまに又もなき名はたちぬへし人にくからぬ世にしすまへは

ひむかしの五條わたりに人をしりおきてまか
りかよひけりしのひなる所なりけれはかとより
しもえいらてかきのくつれよりかよひけるを
たひかさなりけれはあるしきゝつけてかの
みちに夜ことに人をふせてまもらすれはいき
けれとえあはてのみかへりてよみて
やりける
なりひらの朝臣

人しれぬわかかよひちの関守はよひ〳〵ことにうちもねなゝむ

題しらす
つらゆき

しのふれと恋しき時はあしひきの山より月のいてゝこそくれ

よみ人しらす

こひ〳〵てまれにこよひそあふさかのゆふつけ鳥はなかすもあらなん

をのゝこまち

秋の夜もなのみなりけりあふといへは事そともなくあけぬるものを

凡河内みつね

なかしとも思ひそはてぬむかしよりあふ人からの秋の夜なれは

よみ人しらす

しのゝめのほから〳〵とあけゆけはおのかきぬ〳〵成そかなしき

藤原国経朝臣

明ぬとて今はの心つくからになといひしらぬ思ひそふらん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
としゆきの朝臣

暗めして海道にはやきさしく雨瀬となりかゝる

竊（一説ウツク　一説チヨウ用之）　鄙しらす

志賀の浦のかなしみ秋ちかつるらうちさいにたりける

見人しらす

郭公夢かうつゝかあさ露の世の中にきえしおりおもひ寄

逢あけん君がなからめてに夜のふる世に人みけんは

大江千里

けさりとおきけ世のをも吉さりれ思ひのうちに来て行

人よあひをくりしなし見てつゝけ　高秋

たちしの朝臣

秋めり来る夢の覚めはて地とかくおもやけあらし

なりいての朝臣行程のくゝるめりそうけ

阿弥言たりけるゝ人はさとくろうにあひくやう

あしなひくや路しくへなりて世かある事ぞ

あいさはむりのにしりかとせよりける

見人しらす

君やもし秋や雪消なりけると夢かうつゝか様てはかなき

山て　あはしくの朝臣

かきくらしはかのやみにまよひまさつとつゝ世ことにさかめる

逢けるに　見人しらす

しらぬやとはかろいさなかの夢にてさとにありけり

さ夜ふけくあるはさる月夜にあはれも君はあひみる

君が君もわれもしらすなにつくるもはかなあひけり

花の香はせぬよしもしらぬあつさのなきにあひそめん

よしの河水の心ははやくともたきのおとにはたてしとそ思ふ
恋しくはしたにを思へ紫のねすりの衣いろにいつなゆめ
をのゝはるかせ
花すゝきほにいてゝこひは名をおしみしたゆふひものむすほゝれつゝ
橘のきよきかしのひにあひしれりける女
のもとよりをこせたりける
よみ人しらす
おもふとちひとりひとりか恋しなはたれによそへて藤衣きむ
返し
橘のきよき
なきこふる涙に袖のそほちなはぬきかへかてら夜こそはきめ
題しらす
こまち
うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるかわひしさ
限なき思のまゝに夜もこむゆめちをさへに人はとかめし
夢ちにはあしもやすめすかよへともうつゝにひとめみしことはあらす
よみ人しらす
思へとも人めつゝみの高けれは河とみなからえこそわたらね
たきつせのはやき心をなにしかも人めつゝみのせきとゝむらむ
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
きのとものり
紅の色にはいてしかくれぬの下にかよひて恋はしぬとも
題しらす
みつね
冬の池にすむにほとりのつれもなくそこにかよふと人にしらすな
さゝの葉におく初霜の夜をさむみしみはつくとも色にいてめや
よみ人しらす

山しなのをとはの山のをとにたに人のしるへく我こひめやも
この哥ある人あふみのうねめのとなむ申す
きよはらのふかやふ
みつしほのなかれひるまをあひかたみみるめのうらによるをこそまて
平貞文
白河のしらすともいはしそこきよみ流てよゝにすまんと思へは
とものり
したにのみこふれはくるし玉のをのたえてみたれん人なとかめそ
我こひをしのひかねてはあしひきの山橘の色にいてぬへし
よみ人しらす
おほかたは我名もみなとこき出なん世をうみへたにみるめすくなし
平貞文
枕より又しる人もなきこひを涙せきあへすもらしつる哉
よみ人しらす
風ふけは浪うつきしの松なれやねにあらはれてなきぬへらなり
この哥はわか恋人のいくくねにあらはるゝ也
池にすむ名ををしとりの水をあさみかくるとすれとあらはれにけり
逢事は玉のをはかり名のたつはよしのゝ河のたきつせのこと
むら鳥のたちにし我名今さらに事なしふともしるしあらめや
君により我名は花に春霞野にも山にもたちみちにけり
伊勢
しるといへは枕たにせてねしものをちりならぬ名のそらにたつらん

古今和哥集巻第十四

恋哥四

題しらす　　よみ人しらす

みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人にこひやわたらん

あひみすはこひしき事もなからましをとにそ人をきくへかりける

つらゆき

いそのかみふるの中道なかなかにみすはこひしとおもはましやは

ふちはらのたゝゆき

君といへはみまれみすまれふしのねのめつらしけなくもゆるわかこひ

伊勢

夢にたにみゆとはみえしあさなあさなわかおもかけにはつる身なれは

よみ人しらす

石まゆく水の白浪立かへりかくこそはみめあかすもあるかな

いせのあまのあさなゆふなにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

とものり

春霞たなひく山の桜花みれともあかぬ君にもあるかな

ふかやふ

心をそわりなき物と思ひぬるみる物からやこひしかるへき

凡河内みつね

かれはてん後をはしらて夏草のふかくも人のおもほゆるかな

よみ人しらす

あすか河ふちはせになる世なりとも思ひそめてん人はわすれし

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

思ふてふことのはのみや秋をへていろもかはらぬ物にはあるらん

若むらさき

さしつゞきにも何者にかとおぼしや親と頼む人らの孫娘

人いらるれさきに姫

君やこせ親やゆかりの人のいさしひに猫のいさきもたすけは有り

させハ源氏

と思ひといふ源氏はよき月の晨朝月ぬ給いて翁

しみじみに

月まし秋の月に人をつけやらいこそふかくら見しき あしきを

君こすはとやかくもいかに悪親のゆかしよ哀にも

みやきめりとあるこ若藤をもに風と翁すと若紫を

あれうしゝ今もみてゐふろの方ききとよかやまのて

誰のくるぬたれにまかりとふてらぬるはとあふ人々と父の

つくゆき

若紫のやすくにいあるの唐衣たむしてをもちてもる

君や猫

恋てものからなかるそ人を恨んこおもいせにいふかけ

しみ人しらず

三吉野のたけしはいこその藤はのあみにかへてはやかの

かくらしん枕といふ祇も思よいめのそれたりて

わかの原かくところの明の神と思ふ中姑さくみれた

様々ひきのつら手にまつ手よ秋思ふ人は事見志けせ

この歌のあらぬ人あるれ人とのあふみれる

めよしよまいは君の紀を有ひ申す

若紫の手ひきぬいと深く思ふかけくもとも思ひと思ふなる

このうたはかへしによみてたてまつりける
となむ
里人のことは夏野のしけくともかれゆく君にあはさらめやは
藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける
女をあひしりてふみつかはせりける
ことはにいまゝうてく雨のふりけるをなむ見
わつらひ侍といへりけるをきゝてかの女に
かはりてよめりける
在原業平朝臣
かすかすに思ひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされる
ある女のなりひらの朝臣を所さためす
ありきすと思ひてよみてつかはしける
よみ人しらす
おほぬさのひくてあまたになりぬれは思へとえこそたのまさりけれ
返し　なりひらの朝臣
おほぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせはありといふものを
題しらす　よみ人しらす
すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり
玉かつらはふ木あまたになりぬれはたえぬこゝろのうれしけもなし
たか里によかれをしてか郭公たゝこゝにしもねたる声する
いて人はことのみそよき月草のうつしこゝろは色ことにして
いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことのはうれしからまし
いつはりと思ふものから今さらにたかまことをかわれはたのまん
素性法師

秋風に山のこのはのうつろへは人のこゝろもいかゝとそおもふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

とものり

蝉のこゑきけはかなしな夏衣うすくや人のならむと思へは

よみ人しらす

空蝉の世の人ことのしけゝれはわすれぬものゝかれぬへらなり

あかてこそおもはむ中ははなれなめそをたにのちのわすれかたみに

忘なむと思ふ心のつくからにありしよりけにまつそこひしき

わすれなむ我をうらむなほとゝきす人の秋にはあはむともせす

たえすゆくあすかの河のよとみなは心あるとや人のおもはむ

このうたはある人のいはく中臣のあつま人かうたなり

よと河のよとむと人は見るらめとなかれてふかき心あるものを

そせい法し

そこひなきふちやはさはく山河のあさき瀬にこそあた浪はたて

よみ人しらす

紅のはつ花そめの色ふかく思ひし心われわすれめや

河原左大臣

みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれむと思ふ我ならなくに

よみ人しらす

思ふよりいかにせよとか秋風になひくあさちの色ことになる

ちゝの色にうつろふらめとしらなくに心し秋のもみちならねは

小野小町

あまのすむ里のしるへにあらなくにうらみむとのみ人のいふらむ

しもつけのをむね

くもり日のかけとしなれる我なれはめにこそみえね身をははなれす

つらゆき

色もなき心を人にそめしよりうつろはんとはおもほえなくに

よみ人しらす

めつらしき人を見んとやしかもせぬわかしたひものとけわたるらん

かけろふのそれかあらぬか春雨のふる日となれは袖そぬれぬる

ほりえこくたななし小舟こきかへり同人にや恋わたりなん

伊勢

わたつみとあれにし床を今更にはらはゝ袖やあわとうきなん

つらゆき

いにしへに猶立かへる心かなこひしきことに物わすれせて

人をしのひにあひしりてあひかたくありけれはその家のあたりをまかりありきけるをりに雁のなくをきゝてよみてつかはしける

大伴くろぬし

思ひいてゝ恋しき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや

右のおほいまうちきみすますなりにけれはかのむかしおこせたりける文ともをとりあつめてかへすとてよみておくりける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこしことのは今はかへしてんわか身ふるれはおきところなし

返し

近院の右のおほいまうちきみ

能有 文徳源氏 右大臣 大将時

今はとてかへすことのはひろひおきておのかものからかたみとやみん

題しらず　[illegible]

玉鉾の道はつねにもまとはなん人を問ふとも我かと思はん

よみ人しらず

またいつと頼めも[illegible]つ[illegible]きえてゆく[illegible]

中納言源の昇の朝臣のあふみのすけ[illegible]

ありけるときよみてやりける

昇 延喜八年二月中納言 大納言

閑院

桐坂のゆふつけ鳥にあらはこそ君かゆききを[illegible]

題しらず

伊勢

あかぬ[illegible]人のこころのあらはれて[illegible]

寂

山かつの[illegible]人は[illegible]

さくらゐのことされ　酒井人真

[illegible]人の[illegible]思ひしに[illegible]

よみ人しらず

[illegible]人の[illegible]よ

[illegible]よ

[illegible]

たまつ[illegible]

よみ人しらず

あきもなくなきてはしらす[illegible]

よみ人しらず

[illegible]

古今和哥集巻第十五

恋哥五

五條のきさいの宮のにしのたいにすみける人に
ほいにはあらてものいひわたりけるを正月のとを
かあまりになむほかへかくれにけるあり所は
ききけれとえものもいはて又のとしのはるむめ
の花さかりに月のおもしろかりける夜こそをこひて
かのにしのたいにいきて月のかたふくまて
まてあはらなるいたしきにふせりてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわか身ひとつは
もとの身にして

藤原なかひらの朝臣　仲平 枇杷左大臣

花すゝき我こそしたに思ひしかほにいてゝ人にむすはれにけり

藤原かねすけの朝臣

よそにのみきかまし物をおとは川わたるとなしにみなれそめけん

凡河内みつね

わかことく我を思はん人もかなさてもやうきと世を心みん

もとかた

久方のあまつ空にもすまなくに人はよそにそ思ふへらなる

よみ人しらす

見てもまたまたも見まくのほしけれはなるゝを人はいとふへらなり

きのとものり

雲もなくなきたるあさの我なれやいとはれてのみ世をはへ
ぬらん

恋しさはたゝ梅へ人のあまいは逢はまてまつかる人をまつる恋かあはゝ
しのめの人かはして冷ゆ涙の袖かはらいのゝうちあはいろめ
あはれあまた物思ふ我袖にやとる月くまなくはれあ

何を

しらんはしらす

秋なれてなく白露は啼きぬる袖ゝ枕の下なる涙ぞ
身はあらぬ塩焼衣たえしまゝ袖にあはれや君かきてぬる
宿の涙のよるも物こはよ寝ぬ人のみは我そけれきき
逢みては忘らるゝ恋ゝる世はいかにて梅の花思ふ深くん
暁のしきれて見ゆはとゝ君こはぬ衣は我そくるかく
知る今はかたや梅の風のたゝも人のまよてさうらん
我袖よりのこし涙の玉の袖は君のかよあきやかさなん

山井の浅き心もなくはあらて我身のこ人のなみ世
恋すなれよし身をまとふ事のいかくて見ぬとそうけせい
こよ生まゝもあふて風なきをは恋ひゆ夢ひとゝ人やたゝれいらん
夢なれ後をとこそ成ぬくは我やいよ寝ぬ人やつらき

きんけい法し

とにかくにても夢に見はちて見ん袖に今はかぞそけれきてそ
はさのかれ

貞朝臣登 備中守 仁明字

ひとりのみなかめてやかれつきぬ人を思ふてそむる

信正つんせう

我なとい道もなきまてあれはてつれなき人を松とまつらに
こしへんとつゐて物しり朔より思ふくつの月のいはのさゝるく

よみしらす

こめやとは思ふものから日くらしのなくゆふくれはたちまたれつゝ
いましはとわひにしものをさゝかにの衣にかゝり我をたのむる
今はこしと思ふものからわすれつゝまたるゝ事のまたもやまぬか
月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわひつゝもねん
うへていにし秋田かるまて見えこねはけさはつかりのねにそなきぬる
こぬ人をまつ夕くれの秋風はいかにふけはかわひしかるらん
ひさしくもなりにけるかなすみの江のまつはくるしき物にそありける
かねみのおほきみ
すみの江の松ほとひさになりぬれはあしたつのねになかぬ日はなし
なかひらの朝臣あひしりて侍けるをかれかたに
なりにけれはちゝかやまとのかみに侍ける
もとへまかるとてよみてつかはしける

伊勢
三わの山いかにまちみん年ふともたつぬる人もあらしと思へは
題しらす　雲林院のみこ　常康親王 仁明御子
吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の
小野小町
今はとてわか身時雨にふりぬれはことの葉さへにうつろひにけり
返し　小野さたき　貞樹
人を思ふ心のこのはにあらはこそ風のまにまにちりもみため
なりひらの朝臣きのありつねかむすめに
すみけるをうらむる事ありてしはしのあひた
ひるはきてゆふさりはかへりのみしけれは　有常女
よみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめにはみゆる物から

返し　なりひらの朝臣

ゆきかへりそらにのみしてふることは我かゐる山の風はやみなり

題しらす　かけのりのおほきみ

唐衣なれは身にこそまつはれめかけてのみやはこひんと思ひし

とものり

秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらん

源宗于朝臣

つれもなくなりゆく人のことのはそ秋よりさきのもみちなりける

こゝちそこなへりけるころあひしりて侍りける人のとはてこゝちおこたりてのちとふらへりけれはよみてつかはしける

兵衛　藤原高経朝臣女

しての山ふもとをみてそかへりにしつらき人よりまつこえしとて

あひしれりける人のやうやくかれかたになりけれはやけたるちのはにふみをさしてつかはせりける

こまちかあね

時すきてかれゆくをのゝあさちには今は思ひそたえすもえける

物思ひけるころものへまかりける道に野火のもえけるを見てよめる

伊勢

冬かれの野へとわか身を思ひせはもえても春をまたまし物を

題しらす　とものり

水のあわのきえてうき身といひなから流てなをもたのまるゝかな
よみ人しらす
みなせ河ありて行水なくハこそつゐに我身をたえぬと思ハめ
みつね
よしの川よしや人こそつらからめはやくいひてし事ハわすれし
よみ人しらす
世中の人の心ハ花そめのうつろひやすき色にそありける
心こそうたてにくけれそめさらはうつろふ事もおしからましや
こまち
色みえてうつろふ物ハ世中の人の心の花にそありける
よみ人しらす
我のみや世をうくひすとなきわひん人の心の花とちりなは
そせい法し

おもふともかれなん人をいかゝせんあかすちりぬる花とこそみめ
よみ人しらす
今ハとて君かかれなハ我宿の花をハひとりみてやしのはん
むねゆきの朝臣
忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもハおかなん
寛平御時御屏風にうたかゝせ給ひける時よみてかきける
そせい法し
忘草何をたねと思ひしハつれなき人の心成けり
題しらす
秋の田のいねてふ事もかけなくに何をうしとか人のかるらん
きのつらゆき

初雁の鳴こそわたれ世中の人の心の秋しうけれは

題しらす

あはれともうしとも物を思時なとか涙のいとなかるらん

身をうしと思ふにきえぬ物なれはかくてもへぬる世にこそ有けれ

典侍藤原直子朝臣

あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をは恨し

いなは　もとよのおほきみの女

あひみぬもうきも我身のから衣思ひしらすもとくるひもかな

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

すかのゝたゝおみ

つれなきを今はこひしと思へとも心よはくもおつる涙か

伊勢

人しれすたえなましかはわひつゝもなき名そとたにいはまし物を

よみ人しらす

それをたに思ふ事とて我宿を見きとないひそ人のきかくに

逢事のもはらたえぬる時にこそ人の恋しき事もしりけれ

わひはつる時さへ物の悲しきはいつこをしのふ涙なるらん

藤原おきかせ

怨てもなきてもいはむ方そなき鏡に見ゆる影ならすして

よみ人しらす

夕されは人なき床をうちはらひなけかむためとなれる我身か

わたつみの我身こす浪立かへりあまのすむてふうらみつるかな

あら小田をあらすきかへしかへしても人の心を見てこそやまめ

有そ海の浜のまさこと頼めしは忘るゝ事の数にそ有ける

あしへより雲ゐをさしてゆく雁のいやとほさかる我身かなしも

しくれつゝもみつるよりも言の葉の心の秋にあふそわひしき

秋風のふきとふきぬるむさしのはなへて草葉の色かはりけり

小町

あき風にあふたのみこそかなしけれ我身空しく成ぬと思へは

平さふん

秋風の吹うらかへす葛の葉のうらみても猶うらめしきかな

よみ人しらす

秋といへはよそに聞しあた人の我をふるせる名にこそありけれ

わすらるゝ身をうち橋の中絶て人もかよはぬ年そへにける

又は、こなたかなたに人もかよはす

坂上これのり

逢事をなからの橋のなからへて恋わたるまに年そへにける

とものり

うきなからけぬるあわとも成なゝむなかれてとたにたのまれぬ身は

よみ人しらす

なかれてはいもせの山の中におつるよしのゝ河のよしや世中

古今和歌集巻第十六

哀傷歌

いもうとの身まかりける時よみける　小野のたかむらの朝臣

なく涙雨とふらなむわたり川水まさりなはかへりくるかに

さきのおほきおほいまうちきみ（忠仁公）を白河のあたりにおくりける夜よめる　そせい法し

ちの涙おちてそたきつ白河は君か世まての名にこそありけれ

（延喜二年太政大臣二人也　仍雖不詳人前ト云也　前後ノ由也）

ほりかはのおほきおほいまうちきみ身まかりにける時に深草の山におさめてけるのちによみける　僧都勝延

（昭宣公　寛平三年正月薨　五十六　太政大臣　関白）

空蝉はからをみつゝもなくさめつ深草の山煙たにたて

岑雄

深草の野への桜し心あらはことしはかりはすみそめにさけ

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家につかはしける　きのとものり

ねても見ゆねなくても見ゆおほかたは空蝉の世そ夢にはありける

あひしれりける人の身まかりにける時によめる　きのつらゆき

夢とこそいふへかりけれ世中にうつゝある物と思ひけるかな

あひしれりける人の身まかりにける時によ

よめる　　みふのたゝみね

ぬるかうちに見るをのみやは夢といはん　はかなき世をもうつゝとはみす

あねのみまかりにける時によめる

せをせけは淵と成てもよとみけり　別をとむるしからみそなき

藤原忠房かむかしあひしりて侍ける人のみまかりにける時にとふらひにつかはすとて

よめる　　閑院

さきたゝぬくいのやちたひかなしきは　なかるゝ水のかへりこぬなり

紀友則かみまかりにける時よめる　　つらゆき

あすしらぬわか身と思へとくれぬまの　けふは人こそかなしかりけれ

たゝみね

時しもあれ秋やは人のわかるへき　あるをみるたにこひしきものを

はゝかおもひにてよめる

凡河内みつね

神な月時雨にぬるゝもみちはゝ　たゝわひ人のたもとなりけり

ちゝかおもひにてよめる　　たゝみね

藤衣はつるゝいとはわひ人の　涙の玉のをとそ成ける

おもひに侍ける年の秋山寺へまかりける道にて

よめる　　つらゆき

朝露のおくての山田かりそめに　うき世中を思ひぬるかな

おもひに侍ける人をとふらひにまかりてよめ

る　　たゝみね

すみそめの君か袂は雲なれやたえす涙の雨のみそふる

女のおやのおもひにて山てらに侍りけるをある
人のとふらひつかはせりけれは返事によめる

よみ人しらす

足引の山辺に今はすみそめの衣の袖のひる時もなし

諒闇の年池のほとりの花を見てよめる

たかむらの朝臣

水のおもにしつく花の色さやかにも君かみかけのおもほゆるかな

深草のみかとの御国忌の日よめる

文室（屋）やすひて

草ふかき霞の谷にかけかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

ふかくさのみかと（仁明）の御時に蔵人頭にてよるひる
なれつかうまつりけるを諒闇になりにけれは
さらに世にもましらすしてひえの山にのほり
てかしらおろしてけりその又のとしみな
人御ふくぬきてあるはかうふりたまはりなと
よろこひけるをききてよめる

僧正遍照（蔵人頭左少将 良岑宗貞）

みな人は花の衣に成ぬなり苔の袂よかはきたにせよ

河原のおほいまうちきみ（嵯峨源氏 融 寛平七年八月廿五日薨 七十三）の身まかりての秋
かの家のほとりをまかりけるにもみちの
いろまたふかくもならさりけるを見てかの家に
よみていれたりける

近院右のおほいまうちきみ（寛平七年 大納言 右大将 皇太子傅）

うちつけにさびしくもあるか紅葉もぬしなき宿は色なかりけり

藤原高経朝臣のみまかりてのまたの年の夏
ほとゝきすのなきけるをききてよめる

つらゆき

郭公けさなく声におどろけば君にわかれし時にぞ有ける

さくらをうへてありけるにやうやく花さきぬべき
時にかのうへける人みまかりにければその花を
見てよめる　きのもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれを先に恋ひむとか見し

あるじみまかりにける人の家の梅の花を
見てよめる　つらゆき

色もかも昔のこさににほへどもうへけむ人の影ぞこひしき

河原の左のおほいまうちぎみのみまかりてのち
かの家にまかりてありけるにしほがまといふ
所のさまをつくれりけるを見てよめる

君まさで煙たえにししほがまのうらさびしくも見えわたるかな

藤原のとしもと（利基 高藤之元）の朝臣の右近中将にてすみ
侍りけるざうしの身まかりてのち人もすまず
なりにけるを秋の夜ふけて物よりまうでき
けるついでに見入れければもとありしせんざい
もいとしげくあれたりけるを見てはやくそこに
侍りければむかしを思ひやりてよみ
ける　みはるのありすけ（御春有助）

君がうへしひとむらすゝきむしのねのしげき野べともなりにけるかな

これたかのみこのちゝの侍りけむ時によめりけむ
うたどもとこひけれはかきておくりけるおくに
よみてかけりける　とものり
ことならは言のはさへもきえなゝむ見れは涙の瀧まさりけり
題しらす　よみ人しらす
なき人のやとにかよはゝ郭公かけてねにのみなくとつけなむ
たれ見よと花さけるらむ白雲のたつのとはやくなりにしものを
式部卿（敦慶）のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるを
いくはくもあらて女みこの身まかりにける時に
かのみこすみける帳のかたひらのひもにふみを
ゆひつけたりけるをとりて見れは昔のてにて
この歌をなむかきつけたりける

かすかすに我をわすれぬ物ならは山のかすみをあはれとは見よ
をとこの人のくにまかれりけるまに女にはかに
やまひをしていとよはくなりにける時よみおきて
身まかりにける
よみ人しらす
こゑをたにきかてわかるゝたまよりもなき床にねむ君そかなしき
やまひにわつらひ侍りける秋心地のたのもしけなく
おほえけれはよみて人のもとにつかはしける
大江千里
もみちはを風にまかせて見るよりもはかなき物は命なりけり
身まかりなむとてよめる
藤原これもと

露をなとあたなる物と思ひけむわか身もくさにをかぬはかりを

やまひしてよはくなりにける時よめる

なりひらの朝臣

つゐにゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとは思はさりしを

かひのくにゝあひしりて侍ける人とふらはむとて

まかりけるをみちなかにてにはかにやまひをしていまいまと

なりにけれはよみて京にもてまかりて母に見せよ

といひて人につけ侍ける

在原しけはる

かりそめのゆきかひちとそ思ひこし今はかきりのかとてなりけり

古今和哥集巻第十七

雑哥上

題しらす　よみ人しらす

わかうへに露そをくなる天河とわたる舟のかいのしつくか

おもふとちまとゐせる夜は唐錦たゝまくおしき物にそ有ける

うれしきをなにゝつゝまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを

限なき君かためにとおる花はときしもわかぬ物にそ有ける

ある人のいはくこの哥はさきのおほいまうち

きみの也

紫のひともとゆへにむさしのゝ草はみなからあはれとそ見る

めのおとうとをもて侍ける人にうへのきぬ

をおくるとてよみてやりける

紫の色こき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける

なりひらの朝臣

大納言ふちはらのくにつね（国経 寛平六年五月五日任中納言 即従三位）の朝臣の宰相より中
納言になりける時そめぬうへのきぬあやをおく
るとてよめる　近院右のおほいまうちきみ（于時大納言 右大臣 皇太子傅）

いろなしと人や見るらむ昔よりふかき心にそめてし物を

いその神なむまつか宮つかへもせていそのかみ
といふ所にこもり侍りけるをにはかにかうふり
たまはれりけれはよろこひいひつかはすとてよみて
つかはしける　ふるのいまみち

日のひかりやふしわかねはいその神ふりにし里に花もさきけり

二条のきさき（高子 貞観八年二月入内 十年十二月生第一皇子 十一年二月為皇太子 元慶元年正月即位日為中宮 六年正月為皇太后）の東宮のみやすん所と申
る時におほはらのにまうてたまひける日よ（春宮母儀女御也）
める　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神世のことも思ひいつらめ

五節のまひひめを見てよめる　よしみねのむねさた

あまつ風雲のかよひちふきとちよをとめのすかたしはしととめむ

五節のあしたにかむさしの玉のおちたりけるを見てたかならむととふらひてよめる
河原の左のおほいまうちきみ

ぬしやたれとへとしら玉いはなくにさらはなへてやあはれとおもはむ

寛平御時にうへのさふらひに侍りけるをのこともかめをもたせてきさいの宮の御方に大みき

きのおろしときこえにたてまつりたりけるを
くら人ともわらひてかめをおまへにもていてゝ
ともかくもいはすなりにけれはつかひのかへりきて
さなむありつるといひけれはくら人のなかにおく
りける　　としゆきの朝臣

玉たれのこかめやいつらこよろきの磯の浪わけおきにいてにけり

女とものみてわらひけれはよめる
　　　　　　　　　　　けんけいほうし

かたちこそみ山かくれのくち木なれ心は花になさはなりなん

方たかへに人の家にまかれりける時にあるしの
衣をきせたりけるをあしたにかへすとてよ
みける　　　　きのとものり

蝉のはのよるの衣はうすけれとうつりかこくもにほひぬるかな

題しらす　　　　よみ人しらす

おそくいつる月にもあるかなあしひきの山のあなたも惜む也

わかこゝろなくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月をみて
　　　　　　　　　　　なりひらの朝臣

おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人の老となるもの

月おもしろしとて凡河内みつねかまうてきたりける
によめる　　　　きのつらゆき

かつ見れとうとくもあるかな月影のいたらぬさともあらしと思へは

池に月のみえけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならていつる月影

題しらす　　　　よみ人しらす

あまの河雲のみをにてはやければひかりとゞめず月ぞながるゝ
あかずして月のかくるゝ山もとはあなたおもてぞこひしかりける
これたかのみこのかりしけるともにまかりて
やどりにかへりてよひと夜さけをのみものがたり
をしけるに十一日の月もかくれなむとしけるおりに
みこゑひてうちへいりなむとしければよみ侍り
ける　なりひらの朝臣
あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなむ
慧子 代格斎院
田むらのみかどの御時に斎院に侍りける（慧子 母藤列子 従五位上 是雄女）
慧子のみこをはゝあやまちありといひて斎院
をかへられむとしけるをそのことやみにければ
よめる　あま敬信　[illegible]の朝臣

天安元年二月廢、其事秘世莫知之、若先是又有此事乎、遂被廢、天慶五年正月六日薨、以述子為斎院 母同惟喬 二年卯退

おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせどもひかりけなくに
題しらず　よみ人しらず
いそのかみふるからをのゝもとがしはもとの心はわすられなくに
いにしへの野中のし水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ
いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありし物也
今こそあれ我も昔はをとこ山さかゆく時もありこしものを
世の中にふりぬる物はつのくにのながらのはしと我となりけり
さゝのはにふりつむ雪のうれをおもみもとくたちゆくわがさかりはも
おほあらきのもりのした草おいぬればこまもすさめずかる人もなし
又はさくらあさのをふの下草
かぞふればとまらぬものを年といひてことしはいたくおいぞしにける
おしてるやなにはのみつにやくしほのからくも我はおいにけるかな

又はたけものゝくろのさきへは
たいらのとしと申せはかとはてあしとてへてあはれなしと
これくろの三のは着あけそりのたきまみるよしと
あむ
はさぬ年もゆたむとりもあへはるゝいまは、やましくると
よりきしく物かしあか孫は年月はあかれあかりとすくはなる
さらめあへとも〔もとし〕といふなれりたもつれなくすくなよこひ
鏡山いさらたちよりて見てゆかむ年へぬる身はおいやしぬると
この手はあるへのいく大伴のくろぬし也
なりしての親をもえぬみくゝあかみしにすくゐる　仔登内親王　桓武皇女　貞観三年九月薨
多時にたりしは宮にはくすまて時くもえまうし
思とつゝひと給るはしく次第よるそれみさ

のとりくるはる事もみそちあまりて
きりあけくみれにとらてありけるに
たいぬるはけのわれなとおもふといふてもなくみまくほしき　余
返し
世中はゆめかうつゝかうつゝともゆめともしらす
寛平御時きさいの宮の歌合のうた　黄子よ詞に
ありてなけれは
三てゆきのやへ山かつくとたいよるか
たるし御時の人々よそなめきと
おほみきしゆそたれはみあへしありける
ついてよつくしさつまる
二条のきさきの柳に

おいぬとてなきつゝわか身せめきたるものはいのちにあまりある
むかしには　しみいとしまさり
ちゝやかの宇治の川きりたえてとそあれといひ思ふ事もなし
我身をもいたくなかなすみのえのきしのいかはゆくよきて
住吉の岸にかよひあはぬ人あるはいくせつてつく人かあらむ
梓らいちへのこねくもよそのはよそねてとひとを恨み
このあいあれ人のうちくかきみのりとの人よりむ也
かくなからやつくせしらはこれおもへはそうれむよ
藤原たかせ
それならもまちしたかさこねしも着衣わらおとに
しみ人して
ゆふつのたきつやはいあらにあやのきてたのみ

きりつゝ我がいはよきせつゝわかれ浪にそゆふわれちてさら山
はなちらせ波浪のおともなくしもえたくさ玉清むかな
なふけとこかをちくしまあ夜さえみの浪にいつかありは
時ゆきかふいたみ人のくもかたゞ時よやさしら
こえまさてきそしみてつらしなる
藤原まさ
きみかたかおほあきなのをあよきくりゆくかなれをあかくに　きく
して　つゆきき
たきつ浪音さえ海の音松あたにうき君かはつゝわか　あれ
なをはよしおかりよる時よある
なよえてはあたゝかいはゝきそれ我にあらぬつつある
ありまちける人のすきよしにさしそへるにまかせて

つかはしける　たゝみね

住吉とあまはつくともなかゐすな人忘草おふといふなり

なにはへまかりける時たみのゝしまにて雨のふりけるをよめる　つらゆき

雨によりたみのゝしまをけふゆけと名にはかくれぬ物にそありける（一本まきれぬ）

法皇にしかはにおはしましたりける日つるすにたてりといふことを題にてよませたまひける

あしたつのたてるかはへをふく風によせてかへらぬ浪かとそみる

中務のみこ（敦慶）の家の池に舟をつくりておろしはしめてあそひける日法皇御覧しにおはしましたりけりゆふさりつかたかへりおはしまさむとしけるをりによみてたてまつりける

伊勢

水のうへにうかへる舟のきみならはこゝそとまりといはましものを

しむせい法し

宮こまてひゝきかよへるからことは浪のをすけて風そひきける

ぬのひきのたきにてよめる　在原行平朝臣

こきちらすたきの白玉ひろひおきて世のうき時の涙にそかる

布引のたきのもとにて人々あつまりてうたよみける時によめる　なりひらの朝臣

ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせはきに

[illegible]

承均法師

たがためにひきてさらせる布なれやよをへて見れどとる人もなき

神たい法し

きよたきのせゞのしらいとくりためて山わけ衣おりてきましを

龍門にまうでゝたきのもとにてよめる

伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山ひめのぬのさらすらむ

朱雀院のみかどぬのびきのたき御らんぜむとて
文月の七日の日おはしましてありける時
さぶらふ人々にうたよませ給ひけるによめる

たちばなのながもり

ぬしなくてさらせるぬのをたなばたにわが心とやけふはかさまし

ひえの山なるおとはのたきを見てよめる

たゞみね

おちたぎつたきのみなかみ年つもりおいにけらしなくろきすぢなし

おなじたきをよめる

みつね

風ふけど所もさらぬ白雲はよをへておつる水にぞありける

田むらの御時に女房のさぶらひにて御屏風の
ゑ御らんじけるにたきおちたりける所おもしろし
これを題にてうたよめとさぶらふ人におほせられ
ければよめる

三条の町　惟喬のみこの母

思ひせく心のうちのたきなれやおつとは見れどおとのきこえぬ

屏風の絵なる花をよめる

つらゆき

さきそめし時よりのちはうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風の絵によみあはせてかきける

坂上これのり

かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそわたれ秋のうけれは

古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらす　　読人しらす

世中はなにかつねなるあすかゝはきのふのふちそけふはせになる

いく世しもあらしわか身をなそもかくあまのかるもに思ひみたるゝ

雁のくる峯の朝霧はれすのみ思ひつきせぬ世中のうさ

をのゝたかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくに事しあれはまつなけかれぬあなう世中

かひのかみに侍ける時京へまかりのほりける人に

つかはしける　　をのゝさたき

宮こ人いかにととはゝ山たかみはれぬくもゐにわふとこたへよ

文屋のやすひてみかはのそうになりてあかた

見にはえいでたゝじやといひやれりける返事
によめる　小野小町
わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ
題しらず
あはれてふ事こそうたて世中を思ひはなれぬほだしなりけれ
よみ人しらず
あはれてふことのはごとにおく露は昔をこふる涙なりけり
世中のうきもつらきもつげなくにまづしる物は涙なりけり
世中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらずありてなければ
世中にいづらわが身のありてなしあはれとやいはんあなうとやいはん
山里は物のさびしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり
これたかのみこ
白雲のたえずたなびく峰にだにすめばすみぬる世にこそ有けれ
ふるのいまみち
しりにけんきゝてもいとへ世中は浪のさはぎに風ぞしくめる
そせい
いづこにか世をばいとはん心こそ野にも山にもまどふべらなれ
よみ人しらず
世中はむかしよりやはうかりけんわが身ひとつのためになれるか
よのなかをいとふ山べの草木とやあなうの花の色にいでにけん
みよしのゝ山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせん
世にふればうさこそまされみよしのゝいはのかけみちふみならしてん
いかならん巌の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらん
あしひきの山のまにまにかくれなんうき世中はあるかひもなし

世中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれる雪やけなまし

おなじもじなきうた

ものゝべのよしな

よのうきめみえぬ山ぢへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ

山のほうしのもとへつかはしける

凡河内みつね

世をすてゝ山に入人山にても猶うき時はいづちゆくらむ

物思ひける時いときなきこを見てよめる

今更になにおひいづらん竹のこのうきふししげき世とはしらずや

題しらず

読人しらず

世にふれば事のはしげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり

ある人のいはく、たかつのみこの哥也 高津内親王 桓武女

わが身からうき世中となづけつゝ人のためさへかなしかるらむ

おきのくにゝながされて侍りける時によめる

たかむらの朝臣

おもひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせむとは

田むらの御時に事にあたりてつのくにのすまといふ所に

こもり侍りけるに宮のうちに侍りける人につかはしける

在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらばすまのうらにもしほたれつゝわぶとこたへよ

左近将監とけて侍りける時に女のとぶらひにおこせ

たりける返事によみてつかはしける

をのゝはるかぜ 寛平二年任右少将

あまひこのおとつれしとそ今は思ふ我か人かと身をたとる世に

つかさとけて侍りける時よめる

平さたふん

うき世にはかとさせりとも見えなくになとかわか身のいてかてにする

ありはてぬいのちまつまのほとはかりうき事しけくおもはすもかな

みこの宮のたちはきに侍りけるを宮つかへつかうまつらすとて

とけて侍りける時よめる

みやちのきよき

つくはねのこのもとことに立そよる春のみ山のかけをこひつゝ

時なりける人のにはかに時なくなりてなけくを見て

みつからのなけきもなくよろこひもなきことを

思ひてよめる

清原ふかやふ

ひかりなき谷には春もよそなれはさきてとくちる物思ひもなし

かつらに侍りける時に七条の中宮のとはせ給へりける

御返事にたてまつりける

伊勢

久方の中におひたるさとなれはひかりをのみそたのむへらなる

きのとしさたかあはのすけにまかりける時に

むまのはなむけせむとてけふといひをくれりける時に

こゝかしこにまかりありきて夜ふくるまて

見えさりけれはつかはしける

なりひら朝臣

今そしるくるしき物と人またむさとをはかれすとふへかりけり

これをきゝてみなこのうたにまいりかゝりけれはよ
かくらひおりてそのとて所々物ゝくに正月
まよふひとてありけるよひえの山
すとおりゐにゆきてといふ事ありえく
かのむらさきのほとりにて木見るにつれく
してそとみるしくしてかゝりまいらせ
よきくをくりける
わかれにゆめの世思ひしきやゆきさしきてき
深草のさとにすみ侍く宗へまいりそちこ
あり人よみてとりける
年をへてすみこし所を出ていなはいとゝ深草のゝとやなりなん
読人しらす

野とならはうつらとなきて年はへんかりにたにやはきみはこさらん
題しらす
我よきみなよなよみうつりしはきさらぬるあまともあり
このうえある人ひとしれすこゝろわけけるかなしきうれ
のおもひにあるにふれなりはなかけ
めてよみまかりてあけにおりてもみてはなし
につれもすゝけるとおもひける
むかし
かよはしきまゝとおもひをうつ心も見え
今日よ人もなかりせはやつれて
とものひさしうまゝてこゝろうりけるに
見てつりくる

みつね

水のおもにおふるさ月のうきくさのうき事あれやねをたえてこぬ

人をとはてひさしうありけるおりにあひうらみけれはよめる

身をすてゝゆきやしにけむおもふよりほかなる物は心なりけり

むねをかのおほよりかこしよりまうてきたりける時に雪のふりけるを見ておのかおもひはこのゆきのことくなむつもれるといひけるおりによめる

きみかおもひ雪とつもらはたのまれす春よりのちはあらしとおもへは

返し　宗岳大頼

きみをのみおもひこしちのしら山はいつかは雪のきゆる時ある

こしなりける人につかはしける　きのつらゆき

思ひやるこしのしら山しらねともひとよも夢にこえぬよそなき

よみ人しらす

いさこゝにわか世はへなむすかはらやふしみのさとのあれまくもをし

わかいほはみわの山もとこひしくはとふらひきませすきたてるかと

きせん法し

わかいほはみやこのたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり

よみ人しらす

あれにけりあはれいく世のやとなれやすみけむ人のおとつれもせぬ

ならへまかりける時にあれたる家に女の琴ひきけるをきゝてよみていれたりける

よしみねのむねさた

わひ人のすむへきやとゝ見るなへになけきくはゝることのねそする

はつせにまうつる道にならの京にやとれりける時よめる

二条 源いたるの朝臣女

人ふるす里をいとひてこしかともならの宮こもうき名なりけり

題しらす

よみ人しらす

世中はいつれかさしてわかならむゆきとまるをそやとゝさたむる

相坂の嵐の風はさむけれとゆくへしらねはわひつゝそぬる

風のうへにありかさためぬちりの身はゆくへもしらすなりぬへらなり

家をうりてよめる

伊勢

あすか河ふちにもあらぬわかやともせにかはりゆく物にそ有ける

つくしに侍りける時にまかりかよひつゝこうちける人のもとに京にかへりまうてきてつかはしける

きのとものり

ふるさとは見しこともあらすをのゝえのくちしところそこひしかりける

女ともたちと物かたりしてわかれてのちにつかはしける

みちのく 橘すゑなかゝ女

あかさりし袖のなかにやいりにけむわかたましひのなき心ちする

寛平御時にもろこしのはう官にめされて侍りける時に東宮のさふらひにておのこともさけたうへけるついてによみ侍りける

ふちはらのたゝふさ

なよ竹のよなかきうへにはつしものおきゐて物を思ふころかな

歌よみす　しみてしかは

風ふけはおきつしら浪たつた山夜半にや君かひとりこゆらん

ある人この歌は昔大和の国なりける人のむすめにある人すみけりこのむすめおやも

なくなりて家もわるくなりゆくあひたにこの

このおとこ河内の国に人をあひしりて

かよひつゝかれやうにのみなりゆきけりさりけ

れともつらけなるけしきもみえてからへ

いくことにたゝこゝろのことくゆるしてやりて

やりけれはあやしと思ひてもしなきま

よそに心やあるとうたかひて月のおもしろ

かりける夜かへてゆくやうにて前栽の

なかにかくれて見けれは夜ふくるまてことを

かきならしつゝうちなけきてこのうたを

よみてねにけれはこれをきゝてそれより又ほかへ

もゆかすなりにけりとなむいひつたへたる

そのころみかきはらより唐衣きてのみかはりて

此うたを古今にいれられて事のほかおもしろき

自讃の御内百首集といふ抄つけたまひしに

としせきまにかれかよみてそへてつけけるは

文屋ありすゑ

神無月の時分かきけるあひたのなにかしかいとうれ

寛文御時分に書かへりけるついてよりて

ありける

大江千里

あしたつのひとりおくれてなくこゑは雲のうへまてきこえつかなむ　ちさと

藤原かちおむ

ひとしれぬ思は春かすみたちいてゝきみかめにもみえなむ

うためしゝ時にたてまつるとてよみておくに
かきつけてたてまつりける

伊勢

山河のをとにのみきくもゝしきを身をはやなからみるよしもかな

古今和歌集巻第十九

雑躰

短哥

題しらす　　読人しらす

あふことのまれなる色におもひそめわか身はつねに
あまくものはるゝ時なくふしのねのもえつゝとはに
おもへともあふことかたしなにしかも人をうらみむ
わたつみのおきをふかめておもひてし思ひは今は
いたつらになりぬへらなりゆく水のたゆる時なく
かくなわにおもひみたれてふる雪のけなはけぬへく
おもへともえふの身なれはなをやますおもひはふかし
あしひきの山したみつのこかくれてたきつこゝろを

それはかなし あひ見んことは いつかはと 人たのめなる
すみかなれ ゆくへはかれに ひとりぬく あはれなくに
見るぬかり せしことまにに しらいて しらやすへ
志ろ毛への 衣ぬきそり みえつゆれ けふかきりめて
なりへと云 なみたれぬは くらぬすく まけるへるよ
あらむとやへし
あかつきてたちゆりし時のしるへのあはる
ほりゆきよ
ちるやらる 神のみまり 気行の 世にも無す
あはひこの よしはの山の ころうすみ なかひなれく
さみかなし きうとふつき さしつけく 山にはきまに
なくおりよ しれ拾さを かけ小来 そろへの山の
らくらいと 見てぬこしの 神の月 志れくて
花のちの 庭もこれは あゆきれ 拾さえそり
年あくま 時よつきつ あはれふ こゝはひつ
きみとのこ ちりしにいふ 世の人の なかしすらの
年のみれ とゆりなしも あすくと わりくなさこ
うら衣 よわる白と やらくされ よのしてふ
すゑきの なほまつるこ まさくの 中まつくもと
いせの海の うれ志かりし わらひあるめ よわりとすれさ
そ海れとの みゝき心 思ひあへお 所あこゝ海の
年ぬへく 大宮よのみ ひさらくの ひゆまりわに
ゆふそて むそりみかせぬ わやとの 志おつさねる
らさあて あかろるいそれ ちりや志ぬん

おもふらよくくくしてさつなわなくらく

三十四番

くれ竹の　よゝのふること　なかりせは　いかほのぬまの
いかにして　思ふ心を　のはへまし　あはれむかしへ
ありきてふ　人まろこそは　うれしけれ　身はしもなから
ことの葉を　あまつそらまて　きこえあけ　すゑのよまての
あとゝなし　今もおほせの　くたれるは　ちりにつけとや
ちりの身に　つもれることを　とはるらむ　これを思へは
忠岑集云[illegible]
けたものの　雲にほえけん　心ちして　ちゝのなさけも
おもほえす　ひとつ心そ　ほこらしき　かくはあれとも
てるひかり　ちかきまもりの　身なりしを　たれかは秋の
くるかたに　あさむきいてゝ　みかきより　とのへもる身の

みかきもり　おさおさしくも　おもほえす　こゝのかさねの
なかにては　あらしの風も　きかさりき　今は野山し
ちかけれは　春はかすみに　たなひかれ　夏はうつせみ
なきくらし　秋はしくれに　袖をかし　冬はしもにそ
せめらるゝ　かゝるわひしき　身なからに　つもれるとしを
しるせれは　いつゝのむつに　なりにけり　これにそはれる
わたくしの　おいのかすさへ　やよけれは　身はいやしくて
年たかき　ことのくるしさ　かくしつゝ　なからのはしの
なからへて　なにはのうらに　たつなみの　浪のしわにや
おほほれむ　さすかにいのち　おしけれは　こしのくになる
しら山の　かしらはしろく　なりぬとも　おとはのたきの
おとにきく　おいすしなすの　くすりもか　きみかやちよを

わつらへてみし
きみか世に相坂山のいし水こかくれたりと思ひけるかな

冬のなかうた　　凡河内躬恒

ちはやふる神な月とやけさよりはくもりもあへす
初しくれもみちとともにふるさとのよしのゝ山の
山あらしもさむく日ことになりゆけはたまのをとけて
こきちらしあられみたれて霜こほりいやかたまれる
にはのおもにむらむら見ゆる冬くさのうへにふりしく
しら雪のつもりつもりてあらたまのとしをあまたも
すくしつるかな

七条のきさいうせたまひにけるのちによみける
延喜七年六月八日崩 卅六
伊勢

おきつなみあれのみまさる宮のうちはとしへてすみし
いせのあまも舟なかしたる心ちしてよらむかたなく
かなしきになみたのいろのくれなゐはわれらかなかの
時雨にて秋のもみちと人々はおのかちりちり
わかれなはたのむかけなくなりはててとまるものとは
花すゝききみなき庭にむれたちてそらをまねかは
はつかりのなきわたりつゝよそにこそ見め

旋頭哥

題しらす　　よみ人しらす

うちわたすをち方人にものまうす我
そのそこにしろくさけるはなにの花そも

返し

春されは野辺にまつさく見れとあかぬ花
まひなしにたゝなのるへき花の名なれや

題しらす

はつせ河ふるかはのへにふたもとあるすき
としをへて又もあひ見んふたもとあるすき

つらゆき

きみかさすみかさの山のもみちはのいろ神な月
しくれのあめのそめるなりけり

誹諧哥

題しらす　　読人しらす

梅の花見にこそきつれ鶯のひとくひとくといとひしもをる

そせい法し

山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへすくちなしにして

藤原としゆきの朝臣

いくはくの田をつくれはか郭公してのたをさをあさなあさなよふ

七月六日たなはたの心をよみける

藤原かねすけの朝臣

いつしかとまたく心をはきにあけてあまの河らをけふやわたらん

凡河内みつね

むつこともまたつきなくにあけぬめりいつらは秋のなかしてふよは

僧正へんせう

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひと時

よみ人しらす

秋くれは野へにたはるゝ女郎花いつれの人かつまてみるへき

秋きりのはれてくもれは女郎花花のすかたそみえかくれする

花とみてをらんとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

在原むねやな

秋風にほころひぬらし藤はかまつゝりさせてふきりきりすなく

あすはるたゝむとしける日となりの風の雪をふきこしけるをみてそのとなりへよみてつかはしける

清原ふかやぬ

冬なから春のとなりのちかけれはなかゝきよりそ花はちりける

題しらす　　よみ人しらす

磯の神ふりにし恋のかみさひてたゝるに我はいそねかねつる

枕よりあとより恋のせめくれはせんかたなみそとこなかにをる

こひしきかかたもかたこそありときけたてれをれともなきこゝちかな

ありぬやと心みかてらあひ見ねはたはふれにくきまてそこひしき

みゝなしの山のくちなしえてしかなおもひの色のしたそめにせん

あしひきの山田のそほつおのれさへ我をほしてふうれはしきこと

きのめのと

ふしのねのならぬおもひにもえはもえ神たにけたぬむなしけふりを

きのありとも

あひ見まくほしはかすなくありなから人に月なみまとひこそすれ

をのゝこまち

人にあはん月のなきにはおもひおきてむねはしり火に心やけをり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

春霞たなひく野への若なにもなりみてしかな人もつむやと

題しらす　　よみ人しらす

おもへともなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらしとおもへは

平貞文

春の野のしけき草葉のつまこひにとひたつきしのほろゝとそなく

きのよしひと

秋の野につまなきしかのとしをへてなそわかこひのかひよとそなく

みつね

せみのこゑきけはかなしな夏衣うすくや人のならんとおもへは

とも則

からにしきえたにひとむらのこれるは秋のかたみをたゝぬなりけり

よみ人しらす

ことのはゝなかしはやいつかいりそめてなからん世のたねならまし

なけきつゝ人のわかれにたちぬれはみえすやまたしのへはかりに

思ひつゝもねぬるよのみてあるらんかゝりけるわれいかにせん

秋よのなかはよこそかへりぬるかいにてもかへらぬ人とおもひてはならん

われも思ふ人にしたかひぬなかりしをわすれ人の秋をかなしむ

一本 つらゆき

なけきつゝ人をまつとしもなかしくあひみてのちの心なりける

一本 みくにゝ

いてゆくと人をとゝめん袖もなしわかれのなみたにぬれまさりけり

ひとりのみなかめてそふるあきの夜はいかに人をまちつゝもへん

いとゝしくわかれの袖のひまもなくぬれてかなしき秋のゆふくれ

常よりもこの秋かせのすゝしきはわか人のつれなきなるらん

はるかなる秋のゆふへにいかにしてあひみんことのかたくもあるかな

平中興

あふことのかたきは秋のよなかにてこゝろにもあらぬ月をみるかな

たのめおきしひとはこすしてあき風の

ふるさとの山にこもりて思ふ人とおもはれなからすくるよ

なゝき

雲かゝるあさまの山のあさましや人の心をみてこそやまめ

なしはなかるあふしとつくるなり今はうらみはさかゆるにまさる人　伊勢

なかゝまれとなほさらはけくるかやのくてしくあしとあさく
よみ人しらず　りうす

なまよりみなのつゆとなれもしもりてさしも和歌かり人
いそこたりそのわかれこよりつゝくの人のうひたれは　おきかせ

よみなもわかれになれるを人にいつはりにすくなせ
くすし　源つくるか女

ひとしらず
さぬき　英信清少納言女

ねさらしぬめくまけむやしろうけそはなはきわたれと
大輔　源ことすくる女　なかめ

あけきころ山したくあらぬかいつれ花のころてかな
よみ人しらず

なはまとはらのとつみてあしひきの山のいぬなりぬる
人のつ事とこかにほひりてあふにあきしらひ候ぬ

よぬれゆよいて今夜今月の日わくも思ふかなや有かな
ちへよそとすれいつくりかくそ此身なあるかひとすわさきかた

在中のさそいて年をあけい深き君からあなれあなた
在原もとかた

よみたらはいひたるしと思んつらん人よらんつらみし
よみ人しらず

なき御てあぬるくるにおあるん年ぬれりむしとそやはしき
おきかせ

身はすてつ心をたにもはふらさしつゐにはいかゝなるとしるへく

千里

白雪のともにわか身はふりぬれと心はきえぬ物にそ有ける

題しらす　よみ人しらす

梅の花さきてのゝちの身なれはやすき物とのみ人のいふらん

法皇にしかはにおはしましたりける日さるやまのかひにさけふといふことを題にてよませたまうける

躬恒

わひしらにましらなゝきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ

題しらす　読人しらす

世をいとひこのもとことに立よりてうつふしそめのあさのきぬなり

古今和歌集巻第二十

大哥所御哥

おほなほひのうた

あたらしき年のはしめにかくしこそちとせをかねてたのしきをつめ

日本紀にはつかへまつらめよろつよまてに

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかつらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな

あふみふり

あふみよりあさたちくれはうねのゝにたつそなくなるあけぬこのよは

みつくきふり

みつくきのをかのやかたにいもとあれとねてのあさけのしものふりはも

しはつ山ふり

しはつ山うちいでてみればかさゆひの島こぎかくるたななしをぶね

神あそびのうた

とりもののうた

神がきのみむろの山のさかきばは神のみまへにしげりあひにけり

しもやたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがに山かづらせよ

み山にはあられふるらしと山なるまさきのかづら色づきにけり

みちのくのあだちのまゆみわがひかばすゑさへよりこしのびしのびに

わがかどのいたゐのし水さとゝほみ人しくまねばみくさおひにけり

ひるめのうた

さゝのくまひのくま河にこまとめてしばし水かへかげをだに見ん

かへしもののうた

あをやぎをかたいとによりてうぐひすのぬふてふかさはむめの花がさ

まがねふくきびの中山おびにせるほそたに河のおとのさやけさ

この哥は承和の御べのきびのくにのうた

美作やくめのさら山さらさらにわが名はたてじよろづよまでに

これは水のをの御べのみまさかのくにのうた

みののくにせきのふぢがはたえずしてきみにつかへんよろづよまでに

これは元慶の御べのみののうた

きみがよはかぎりもあらじながはまのまさごのかずはよみつくすとも

これは仁和の御べのいせのくにのうた

大伴くろぬし

あふみのやかゞみの山をたてたればかねてぞ見ゆるきみがちとせは

これは今上の御べのあふみのうた

東哥

みちのくうた

あふくまにきりたちくもりあけぬともきみをはやらしまてはすへなし

みちのくはいつくはあれとしほかまのうらこく舟のつなてかなしも

わかせこをみやこにやりてしほかまのまかきのしまのまつそこひしき

をくろさきみつのこしまの人ならは宮このつとにいさといはましを

みさふらひみかさと申せみやきのゝこのしたつゆはあめにまされり

もかみ河のほれはくたるいなふねのいなにはあらすこの月はかり

きみをゝきてあたし心をわかもたはすゑの松山浪もこえなん

さかみうた

こよろきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれなみ

ひたちうた

つくはねのこのもかのもにかけはあれときみかみかけにますかけはなし

つくはねのみねのもみちはおちつもりしるもしらぬもなへてかなしも

かひうた

かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

甲斐かねをねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらん

伊勢うた

をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならすもねてかたらはん

冬の賀茂のまつりのうた　藤原としゆきの朝臣

ちはやふるかものやしろのひめこ松よろつ世ふともいろはかはらし

家々稱證本之外申出書入以墨滅之 今加之

巻第十 物名部

ひくらし　つらゆき

そま人は宮木ひくらしあしひきの山乃山ひこよひとよむなり

在郭公下空蝉上

勝臣

かけりてもなにをかたまのきても見むからはほのほとなりにしものを

をかたまの木友則下

くれのおも　つらゆき

こし時とこひつゝをれはゆふくれのおもかけにのみ見えわたるかな

忍草　利貞下

をきのゐ　みやこしま

をきのゐて身をやくよりもかなしきはみやこしまへのわかれなりけり

からこと　清行下

あやもち

うきめをはよそめとのみそのかれゆく雲のあはたつ山のふもとに

このうた水乃をのみかとのそめとのより田むらへうつりたまうける時によめる

桂宮下

巻第十一

奥山のすかのねしのきふる雪下

けふ人をこふる心は大井河なかるゝ水におとらさりけり

わきもこにあふ坂山のしのすゝきほにはいてすもこひわたるかな

巻第十三

こひしくハきてもみよかしちはやふる下

いぬるこれこの山家はまり何いゝと出てくよわるかりすれ

この三のあゝ人あまれ人とのあそのみ孫なり

さまかると

第十三 秋書之巻

むし ゐねめのわもろわか

山なれよ今のきれとしに善よ人の忘くわらひや やと

巻第十四

思ふよこよのしのや秋とくて下

うちわりひろ乃ひらりのそ今とこひひそろく

わせこうく人きに追さしろくもれゆる見ゆるなて忘るゝ

津養文こひりといふゝなるつきしこるし下

みちとはつみもゆるしすゝのえぬきてにかふにはよ

行ゆき

こひわすれくさ

古今和哥集序

紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其華於詞林
者也人之在世不能無爲思慮易遷哀樂相
變感生於志詠形於言是以逸者其聲樂
怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感
鬼神化人倫和夫婦莫宜和歌和哥有六
義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰
頌若夫春鶯之囀花中秋蝉之吟樹上
雖無曲折各發歌謡物皆有之自然之理也
然而神世七代時質人淳情欲無分和歌未
作逮于素戔烏尊到出雲國始有三十一
字之詠今反哥之作也其後雖天神之
孫海童之女莫不以和哥通情者爰及
人代此風大興長歌短哥旋頭混本之類
雜躰非一源流漸繁譬猶拂雲之樹
生自寸苗之煙浮天之波起於一滴之露

至如難波津之什獻
天皇富緒川之篇報太子或事關神異
或興入幽玄但見上古歌多存古質之語
未為耳目之翫徒為教戒之端古
天子毎良辰美景詔侍臣預宴筵者獻
和歌君臣之情由斯可見賢愚之性於是
相分所以隨民之欲擇士之才也自大津
皇子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵
移彼漢家之字化我日域之俗民業一
改和歌漸衰然猶有先師柿本大夫者
高振神妙之思獨歩古今之間有山邊
赤人者並和歌仙也其餘業和歌者
綿々不絶及彼時變澆漓人貴奢淫
浮詞雲興艶流泉涌其實皆落其
華孤榮至有好色之家以此為花鳥之
使乞食之客以此為活計之謀故半為

婦人之右雖進大夫之前近代存古風
者纔二三人然長短不同論以可辨華
山僧正尤得哥躰然其詞華而少實
如畫好女徒動人情在原中將之哥其
情有餘其詞不足如萎花雖少彩色而
有薫香文琳巧詠物然其躰近俗如
賈人之著鮮衣宇治山僧喜撰其詞
華麗而首尾停滯如望秋月遇曉

雲小野小町之哥古衣通姫之流也然艶
而無氣力如病婦之著花粉大友黒主之
歌古猿丸大夫之次也頗有逸興而躰甚
鄙如田夫之息花前也此外氏姓流聞者
不可勝數其大底皆以艶為基不知哥之
趣者也俗人争事榮利不用詠和哥
悲哉〻〻雖貴兼相將富餘金錢而骨
未腐於土中名先滅世上適為後世被

知者唯和哥之人而已何者語近人耳義
慣神明也昔平城天子詔侍臣令撰萬
葉集自尓以来時歴十代數過百年其
後和哥弃不被採雖風流如野宰相軽情
如在納言而皆以他才聞不以斯道顕
陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外
恵茂筑波山之陰淵変為瀬之聲
寂々閉口砂長為巌之頌洋々満耳

思継既絶之風欲興久廃之道爰詔大
内記紀友則御書所預紀貫之前甲斐
少目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等
各献家集并古来旧哥曰続万葉集
於是重有詔部類所奉之哥勒為二
十巻名曰古今和哥集臣等詞少春花
之艶名竊秋夜之長况哉進恐時俗之
嘲退慙才藝之拙適遇和哥之中興

以楽吾道之再昌嗟乎人丸既没和哥
不在斯哉于時延喜五年歳次乙丑
四月十五日臣貫之等謹序

此集家々所稱雖説々多且任師説又
加了見爲備後學之證本不顧老眼
之不堪手自書之
近代僻案之好士以書生之失錯稱有
識之秘事可謂道之魔性不可用之
但如此用捨只可隨其身之所好不可存
自他之差別志同者可隨之

貞應二年七月廿二日癸亥　戸部尚書藤判
同廿八日己巳讀合訖書入落字了
傳于嫡孫可爲將來之證本

申請御證本書寫點校了
元亨四年十二月十六日　兼好　判
正中元年十二月十三日以家説
授兼好了
前亜相　判
延元々年三月十三日以家説
重授兼好了
権中納言　判

此本予數十年所持之　而先年以為尹卿（冷泉大納言）
奥書本見合之　相違事以朱注付之　其後
文明八年八月中旬以堯孝法印自筆本
（端堯孝法印書之　奥圓雅法師書之）校合之　而已前以朱注之事未
又相違之　仍急削除之　更又以朱書注之字
假名清濁以見合　予以之可為證本者也
入道前左大臣
欣求浄土沙弥　判
春秋六十二

真名序奥抄本云

於真名序者無別口傳歟読本不點之

之為備自身之廢忘拭病眼點之

畢　于時文明第四之暦林鐘下旬之

天降雨日也　於十市無動寺

點之

判　實量公也

又序院御本[illegible]

右以前三條入道左相府御本書寫之

去此十日晩以之終今日申刻終一部

之功　此間毎日不除[illegible]少々夜也　不看字形　墨

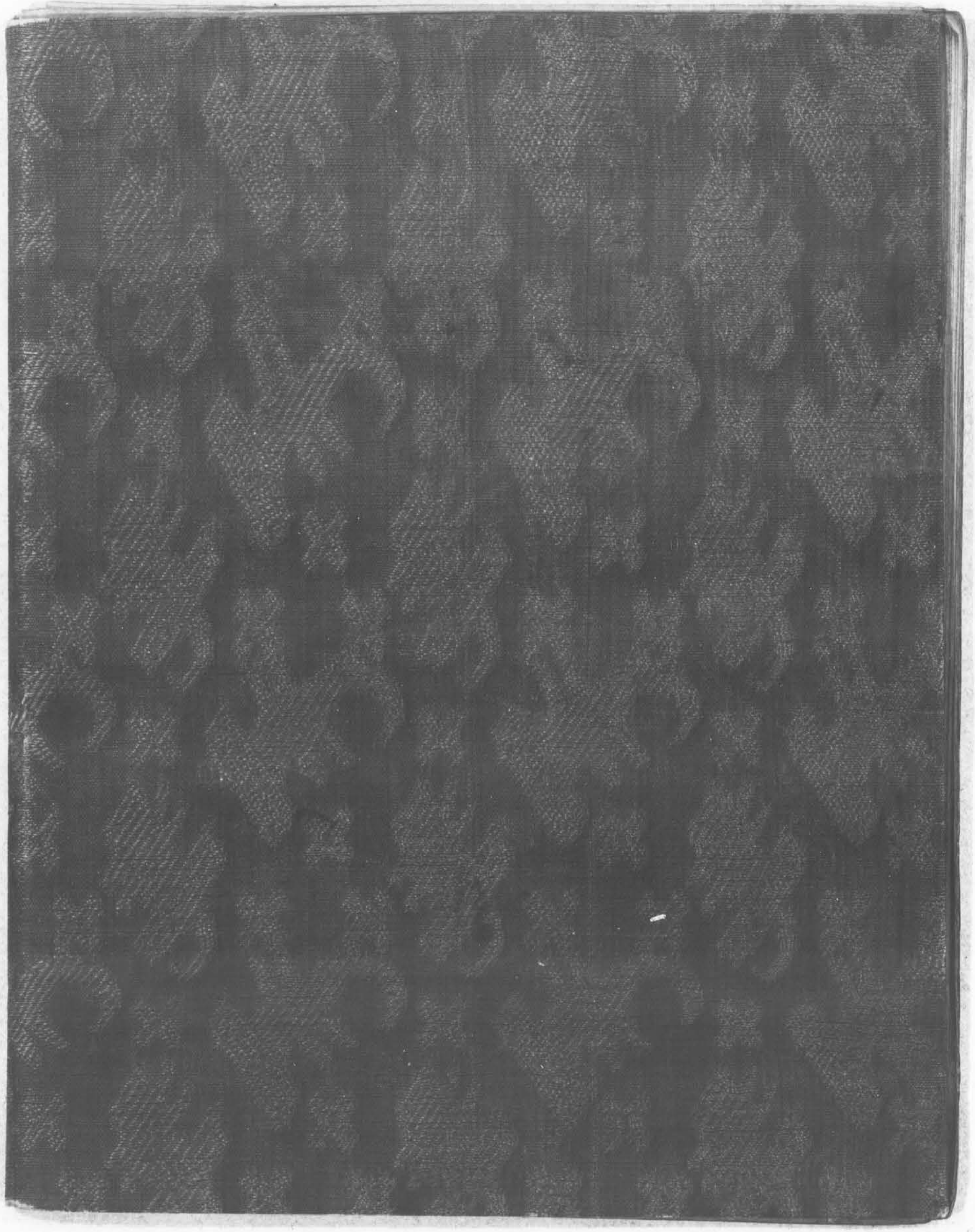
様只為補忘志之已　異本

見去年于時文明十八丙午暦仲冬

廿八日記之

正三位行権中納言兼侍従藤原（花押）　春秋三十二才

翌日讀合畢了

九州大學圖書印

文明十九年丁未暮春之交一読記之 [illegible]